

42384

教科書文庫

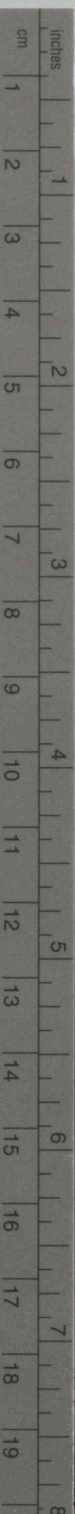
|                |
|----------------|
| 4              |
| 8/0            |
| 42-1938        |
| 20000<br>26335 |

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9  
Ha7  
資料室

女子新國文

新改制版

卷四

375.1  
Ha7

文學博士 芳賀矢一 編  
東京帝國大學教授  
文學博士 橋本進吉 訂補

# 女子新國文

改制  
新版

東京會社 富山房發行



筆方清木 鐘 歌御の雁初

廣島  
大學  
圖書  
印



女子新國文 改制新版 卷四

目次

|   |                 |          |
|---|-----------------|----------|
| 一 | 伊勢の神杉(昭憲皇太后御詠)  | 三        |
| 二 | 秋の讚美            | 上 司小劍 四  |
| 三 | 草花に添へて人の許に(書翰文) | 樋口一葉 九   |
| 四 | 揚子江の秋           | 南部修太郎 一〇 |
| 五 | 鷹が渡る            | 野村傳四 一九  |
| 六 | 思郷のこゝろ(短歌)      | 石川啄木 二五  |
| 七 | 本居翁の遺蹟          | 二六       |

目次

書取  
丙  
カケコサス

本居宣長の母(自修文)……………八波則吉…三七

八 地 震……………新井白石…三〇

九 田園雜興……………大町桂月…三〇

一〇 奥村五百子……………小野賢一郎…三〇

一一 美しい心……………吉田絃二郎…三三

一二 古名將の學問……………湯淺元禎…三〇

やまと心(自修文)……………七

一三 日章旗と水戸烈公……………木宮泰彦…八一

一四 國歌の話……………田邊尙雄…八七

一五 大日本國(詩)……………九

一六 菅公の夫人……………山田新一郎…九

一七 昔の婦人と今の婦人……………下田次郎…一〇五

一八 女神の像……………下村虎六郎…一〇四

一九 日本的譬喩……………三

言葉の變遷(自修文)……………佐々醒雪…一六

二〇 カナリヤ日記……………河東碧梧桐…一三

二一 ちやるめら(詩)……………上田敏…一三

二二 清淨潔白……………一四

二三 五十鈴の流……………河野省三…一四

二四 國家と祭祀その一……………一五

二五 國家と祭祀その二……………一六

80  
87  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

附録

字音假名遣表

後鳥羽天皇御製

奥山のおどろがしたもふみわけて道ある世ぞとひと  
に知らせん

後醍醐天皇御製

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心のをさめ  
がたさを

女子新國文

新改  
版制

卷四

一 伊勢の神杉(昭憲皇太后御詠)

すなほならなん  
吳竹の

人はたゞすなほならなん吳竹の

よにたちこえんふしはなくとも明治十五年

はつかりを待つとはなしにこの秋は

明治十五年

ながめられつゝ

越路の空のながめられつゝ

山家の雨

山ぎとのゆふべさびしきむらさめに

十九年

かきねのむかごこぼれそめたる

夏の回家

こがひする家としられてふくるまで

二十一年

火かげぞみゆる小山田の里



むらぎもの

むらぎものこゝろに問ひてはぢざらば

二十一年

よの人言はいかにありとも

月に日にひらけゆく世の人ごころ

二十二年

むかはん方をまづ定めてよ

信。

つくろひて花をさかせぬことのはに

二十三年

人のまことは見ゆるなりけり

迷  
懐

人のため身のためものをおもふこそ

三十二年

うつせみの世のならひなりけれ

絲

ひとすぢのその絲口もたがふれば

もつれくゝとくよしぞなき

一 伊勢の神杉

はじめにて

上小説家。名は延司小劍貴。明治七年奈良縣に生れた。

和頭の

あらたまの今年を千代のはじめにて

いやさかゆらん伊勢の神杉

二 秋の讚美

上 司 小 劍

秋は昔からものの凋落を意味するやうに思はれて來たけれども、凋落のうちに復興の氣の溢れてゐる事を見遁す事は出來ない。

澄みきつた大氣……それは獨り秋の有する寶ではないか。山も野も皆一つく磨き上げられたやうに鮮かな光を

放つ。遠くにあつた山は近くに引寄せられたやうに、近くの野は愈、近く呼べば應へるばかりである。

秋晴の日に赤蜻蛉の飛びかふのを見るのは風情のあるものである。

秋の太陽は春の太陽よりも人間に優しい。人間が日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と融和するのも秋の特色である。宵の明星の美しく柔かい光が、まづ夕涼の客に親しまれる。團扇片手に顔をおほうて、お星様ばあ、おない、く、ばあ。を宵の明星に向つてしてゐる幼兒の姿も愛らしい。

天體の鮮かに仰がれる秋の夜の美しさ。星の名も二つや三つは覚えてゐて、恆星と惑星とを區別するくらゐの事は

……親しまれる

顔をおほうて



誰にでも出来る。

荒海や佐渡に横たふ天の川

の芭蕉の名句も、もとより初秋の情緒である。

古來詩人といふ詩人は、いづれも天體に親しみをもつてゐる。遠い〜月や星をば、地上の動物や植物のやうに自分の友だちとして見てゐる。牽牛、織女の話などは、いかにも人間と天體とのゆかしい融和を語るものではないか。これも秋の情趣の一つであらう。

寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。しぎ立つ澤の秋の夕暮の西行法師や、芭蕉破れてたらひに雨を聴く芭蕉など、皆秋の詩人と稱する事が出

詩人は…活躍してゐる  
しぎ立つ澤の云々  
一心なき身にもあ  
はれはしられけり  
しぎ立つ澤の秋の  
夕暮（新古今集）  
芭蕉破れて云々  
一芭蕉野分してた  
らひに雨を聴く夜  
かな  
たらひ（鹽）

来る。

枯木、寒鴉の寂しみに生きた芭蕉は、秋と言ふよりは寧ろ初冬の情趣に生きた詩人と言はなければならぬが、彼の讚美した時雨、枯野などは、俳諧の季に於ては冬に屬するけれども、情緒の上からはどうしても秋のものである。澄みきつた、さうして寂しみのある秋といふ時季があるので、よくも生きて來たとでも言へさうな詩人が、日本には非常に多い。

天體の一つとして最も我々の世界に近い月は、昔から多くの詩人によつて讚美され、わけても東洋の詩人によつて感傷的な言葉を投げられてゐる。さうして、それはすべて秋

石に留る  
香煙置てぬら  
す時雨かな

澄みきつたさうし  
て…秋

言へさうな

花みぢな枯れ  
上原を二馬  
草の種

に於てである。

月と言へば、もう秋のものといふ氣がするではないか。名月を抱いて……の名句を赤壁の賦に遣した蘇東坡の秋を讚美した心と、我が芭蕉翁が深川の庵室に名月を仰ぎながら、たゞ一人池をめぐりて夜もすがらの寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣である。

星辰の鮮かに仰がれる秋の夜には、巷の天文學者がなかなか多く現れる。我々が天體に對して絶えず考へてゐる事は、あの自由な組織である。毫も個々の自由が束縛されずに、殆ど絶對自由のうちに一定の軌道を循つてゐる星の姿が羨ましい。あれに比べると、地球上の人間の生活の不自由さ、

名月を抱いて云々  
「飛仙を挾んで以て遊遊し、名月を抱いて而して長へに終らん。」(前赤壁賦)  
蘇東坡  
宋代の文豪。名は軾。東坡はその號。徽宗の建中靖國元年(西紀一一〇一年)歿。年六十。  
深川の庵室  
もと東京市深川區萬年橋の北際にあつた。  
池をめぐりて云々  
「名月や池をめぐりて夜もすがら」  
讚美した心と……  
……心とは……  
束縛されずに……  
絶對自由のうちに循つてゐる

空なればこそ

だらしなさ……。そんな事を考へるのも、また秋の夜の感傷の一つで、澄みきつた空なればこそ、天體に對して讚美の聲を發するのである。

天體の讚美は即ち秋の讚美である。

### 三 草花に添へて人の許に 樋口一葉

螢追ひしは昨日と思ふに、残る暑さも何時しか消え候て、朝夕の風まことに秋よと覺えられ候。市中を離れたる私宿は、夏の暑さをさのみに存じ申さざりし代り、秋の露けさ増りぬべき事、今より思ひわたされてもの寂しきやうに御座候。する事なしの手すさびに萩、ききや

樋口一葉  
明治時代の小説家、歌人。名は夏子。東京市人。明治二十九年(西紀一九〇六年)歿。年二十五。

秋の露けさ増りぬべき事

ききやう(桔梗)

をみなへし(女郎花)

丈高過ぎなど候はんなど

さすが(流石)

おはしまさずや

さで(又手)

南部修太郎  
小説家。仙臺市の人。昭和十一年歿、年四十五。

う、をみなへしなどまがきのうちに作りて、何時しかと花待ちるしに、此頃ぞその色やうく見えそめ候。萩は花少く、をみなへしは丈高過ぎなど、いづれ美しき選びにはもれ候はんなど、さすがに野そだちよとさる方に御あはれみあらば辱なく、一枝づつ手折さし上げ候。この尾花の穂に出でて招く心もおしはかり給はゞ、遠里小野にも候はぬを、蟲の音聞きにおはしまさずや。前の小川にさでさして、魚とらふる子などをかしきも候。かしこ。

(二葉全集)

#### 四 揚子江の秋

南部修太郎

江蘇平野  
江蘇省にある平野。揚子江の下流。

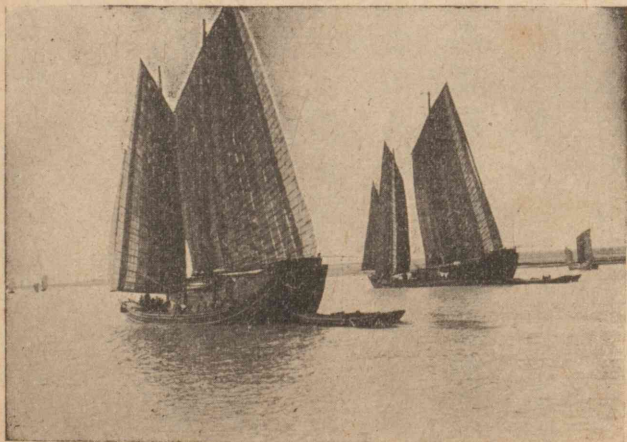
十五年前  
大正十年。

杭州  
浙江省北部の開港場。

蘇州  
江蘇省の都會。東洋のベニスといはれる。

南京  
蘇州の西北にある江蘇省西部の都會。寂しい姿に、感ぜさせられた。

廣くおほどかなその姿。黄泥の水悠々たるその流。自然の美と詩情との豊かな江蘇平野の蕭條たる秋の眺を擅にしなから、あの揚子江を下つた一日一夜を、私は今もなほ感慨深く思ひ浮べる。それは十五年前の秋の半ばの事であつたが、杭州に静雅な西湖の勝を探り、水の都蘇州を訪ねて、城内から遠い城外の幾つかの史蹟を巡り、更に南京を訪れて、荒廢した舊都の寂しい姿に、人事の悲しさ、



揚子江

上海  
江蘇省滬海道黃浦  
江に臨む開港場

はかなさを深く感じさせられた私は、その南京城外の下關シヤアワンから日清汽船會社の岳陽丸の客となつて、南支那の最後の旅路を、上海へと下つたのであつた。

南京に過したその前日は、寥落の都にもふさはしい時雨模様の曇日であつたが、それが一夜のうちに名残もなく晴上つて、その日は大陸の秋らしく、空は紺青深く澄渡り、稍黄色みをおびた日の光も明るく朗かであつた。そして赤煉瓦の建物や工場の煙突の立つてゐる對岸の浦口ブウカフの町、振返る南京城外の獅子山や鍾山の眺もくつきりとしてゐて、湖岸の蘆荻が靜かな風にさやくとそよいでゐた。

「今日は珍しいお天氣です。下關の宿屋から荷物をさげて、

そよぐ(戦)

私を汽船發著所まで見送つてくれた若い支那人ボーイは、達者な日本語でさう私に言つた。

流れてゐるのかゝらないのか殆どわからないやうな靜かな水面を滑るやうにして、岳陽丸が上流の方にその瀟洒な姿を見せたのは、ちやうど正午時分であつた。私は埠頭階上の乗船口からすぐ船に乗りこんで、定め船室に荷物を置いて來ると、また上甲板に引返して、手摺によりながら、棧橋の方を眺めてゐた。其所には荷役を争ふ苦力クワリたちが、卑しく騒がしくひしめき合つてゐる。そのぶざまさに思はず不快な氣持をそゝられた私は、視線をそらして、反對の甲板の方へ足を向けながら、船の高みからすると一層廣々と一層明

そのぶざまさに  
そゝられた

船の高み……見え  
る

るく開けて見える江の景色に、うつとりと眺め入つてゐたが、程もなく鈍く尾をひいた汽笛が鳴り響くと、船は何時となく埠頭を離れてゐた。

川の船路とは言へ  
トン(噸)

船は：：進み下つて行くのである

草を食む水牛の群  
：：それ等は

川の船路とは言へ、船は白塗の姿麗しい三千餘トンの岳陽丸である。そしてその大船を軽く波上に浮べて、黄に濁る水靜かに流れ行く揚子江。川幅は時に五六町に廣がり、時に二三町に迫るが、曲折も大きくなだらかに、船はその間を機關の音も微かに、小搖ぎもせずに進み下つて行くのである。さすがに秋である。江岸に美しくそよぐ蘆荻も、所々うつすらりと黄ばんでゐる。草を食む水牛の群、すく〜と群がり立つポプラの木、垂葉の綠深い楊柳の蔭に憩ふ牧童の姿、それ

岸近く…古塔の姿は

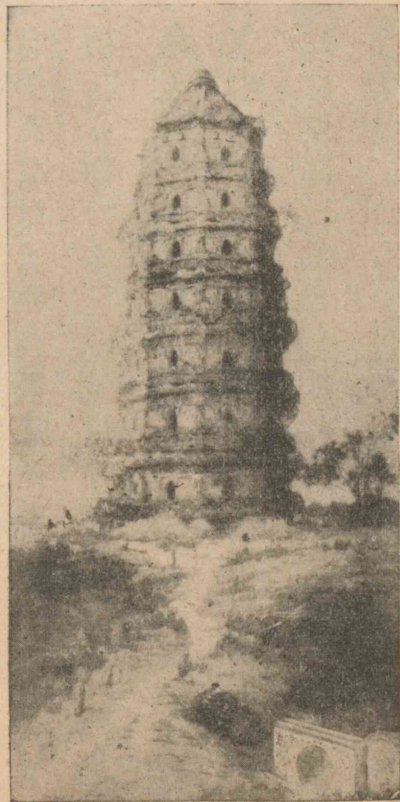
感じさせずにはおかない

鎮江  
江蘇省の河港。

等はいづれも江岸の好ましい眺であるが、岸近く立つ丘陵の頂に時々見える苔むした、朽ち崩れたやうな古塔の姿は、いづれもその昔榮えては、また何時となく亡びた帝王たちおごりし帝王の廢墟の塔の豪華の夢を物語る物であらう。杭州の雷峯塔、蘇州の北寺の塔や虎丘の塔、上海郊外の龍華寺の塔などと、江蘇平野一帯には、とりとりの傳説をもつ古塔の姿を、幾つとなく見る事が出来るが、殊に江岸に眺められるそれ等は、今も昔も變りなく流れて行く長江の水に對して、人事のはかなさ、寂しさを感じさせずにはおかない。

八十キロメートル程を四五時間に下つて、船が南岸の鎮江キヤンに投錨したのはもうたそがれの頃で、江を流れる靜かな

夕風も、何となく肌に冷やかだつた。私たち日本人の一等船客四五人づれば、船長の好意で船をおりて、鎮江の町を小一時間程散歩して、すつかり日の暮れおちた頃、また船に歸つて來た。西の方の空には三日月がかり、きらめく星影も美しく、江岸に沿うてほつくと明りのついた鎮江の埠頭は、いかにも水郷らしい、しつとりした眺であつた。



(筆楊春村中) 塔の丘虎

江岸に……鎮江の埠頭

金山寺  
江蘇省丹徒縣金山の上にある。今は江天寺と言ふ。

蕉山島  
鎮江の東北。揚子江中にある

私は……視線を投げてゐた



金山寺

「あれが名高い金山寺で、ずっと向ふの山の頂に見えるのが甘露寺です。船長はうつすりとした夕靄の彼方を指さしながら、さう説明した。船はまた何時となく埠頭を離れて、蕉山島の影を左にしなから、静かな波間を滑るやうに進んでゐた。私は甲板の手摺によつて、思はずも異郷の旅人らしい感傷をさそはれながら、一人江岸の夜景に寂しい視線を投げてゐた。颯々たる冷い夜風。柔かな機關の響。静かな船の蹴波の音。江の幅は次第に廣くな

驚奇  
さえる(牙)

……をして……樂  
しませ

人をして……催さ  
せた

つて、岸邊の蘆荻も闇の中に吸はれてしまひ、三日月の影も何時となく遠くの山の端に隠れて、空高き星の光のみ獨りさえて、夜は漸く更けて行く。すべては何といふ感慨深い情景であつたらうか。

階梯

思へば有史以來三千餘年、或時は榮華に醉ふ帝王宮嬪たちの豪華な宴の畫舫を浮べ、或時は醉詩人をして秋の月明を樂しませ、或時は傷ましい敗將の涙をさそひ、溯る人、下る人をして、<sup>不幸</sup>數奇多様な感慨を催させたに違ない長江の水。人生のあらゆる有爲轉變もよそに流れて盡きず、盡きず流れて五千餘キロメートル、今もなほ黄泥の水悠悠々と、その偉大な姿を私の眼前に蜿蜒と延べてゐる。私は暫く視線を伏せ

感じさせられて

まぶた(暇)

まぶたの潤むを……

野村傳四  
英文學者、教育家。  
元奈良縣五條中學校長。鹿兒島縣の人。

時は……頃

余が故郷なる

て、暗い水の面に眺め入つてゐたが、自然の悠久に對して、人生の短さはかなさを今更のやうに感じさせられて、思はずまぶたの潤むを禁じ得なかつたのであつた。

五 鷹が渡る

野村傳四

「鷹が渡る」といふ鋭い聲が、秋の空氣を突抜けて、村の一隅から起る。同じ聲が他の一隅にも起る。稻の穂波の黄ばみ渡つた田の中からも起る。椿や竹の林に隠れた家からも起る。時は愁人の膚そゞろに寒い頃、渡鷹の一群が南を指して、秋の空を渡り行く。偉觀は、余が故郷なる大隅の南端を除いては、日本國中いづれの地にも見る事は出来ない。

やし(椰子)  
風薫しい。

余は嘗て黒潮の流を下つた事がある。流の早い海峡を通  
過した事もある。深碧の潮の流は直径十數町に互る一大圈  
を劃して、盛んに渦を巻き、眞白な泡を表面にみなぎらして、  
汽船をも巻きこみ岩をも押流すやうな勢で流れて行く。雪  
寒き朔北の天地から、やしの葉青く風薫しい南洋の冬に渡  
つて行く一種の鷹は、まさにこの潮流と同じく、大空を廻轉  
しつゝ進んで行く。そしてまた同じく偉觀である。

音を發すると間もなく空に吸ひこまれる花火の煙程の  
雲もない秋の空は、日本晴に晴れて、天上には祕密な隱家も  
ない時、南を指して雙翼を伸したこの避寒客の數は十萬か、  
五十萬か、はた百萬か知らぬ。初めひよくらゐに見えた一群

ひよ(鴨)

はやぶさ(隼)

の鳥は、高く舞上る爲に障害物もない大空に直径數町もあ  
る一大圈を劃し始める。一隊が一廻轉したかせぬかといふ  
頃になると、ひよくらゐに見えた形が、雀くらゐに小さくな  
る。すると、一隊はひとまづ南方へ流れ出す。夢のやうにすう  
つと飛んでは翼をせはしく使ふさまは、はやぶさに似てゐ  
る。暫くするとまた廻轉し始める。雀程の影は更に遠ざかつ  
て、糠蟲程になる。更にまた流れ出す。かくして廻轉を繰返し  
行く間に、一個々々の影は、青絹の上に落した墨痕のやうに  
見える。そして一隊が南へ去れば、後の一隊がその後を襲ふ。  
後の一隊が遠ざかれば、またその後の一隊がこれに續く。し  
かもこの大集團に一羽の外れるものもなく、聲を立てるも



百萬の師が…途に上る

のものない。恰も南より北へ奔る天の川が、あらゆる星の影を掠めて、晝の間を逆に流れるが如くに見える。百萬の師が隊伍肅々として萬里遠征の途に上るさまをも想像させる。神韻鏘鏘たる詩集の一卷を繙くやうな心持にもなる。

小學校の兒童は…祝してやる

「鷹が渡る」といふ聲が、この時村の何所かに響き渡ると、直ちに全村の注意をひく。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して、空を仰ぎ、手を拍ち、ちだんだ踏んで、「鷹よ〜」と、小さい喉も張裂けるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝してやる。老人はもみを一杯に干した庭に滑りおりて、見えぬ眼を擦りつゝ、青空を見上げて、過去幾十年の秋の記憶を繰返す。黄ばみ渡つた畑に立つ夫婦は、しばしくはの手を休め、頭の

もみ(粃)

老人は…記憶を繰返す

夫婦は…一行を見送る

手拭を取つて顔の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ、互に相顧みて、更に笑顔に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どん〜南へ去る。見送人の心はさま〜であらう。

鶏は…壯觀を見る

群雀は…行列を送る

裏の畑に穂を啄む鶏は、け〜んな顔を上げ、長く伸した首を傾けて、空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いたやうに騒いでゐた群雀は、「ちゆ〜」といふ一羽の合圖にびたりと鳴りを静め、ひれ伏して、笹蔭から天上の行列を送る。茅葺の屋根に秋の日を浴びて睦ましく遊んでゐた家鳩の夫婦は、あわた〜しく我が巢に引籠つて、空を仰ぎ見る事すら敢へてしない。渡鷹の大奇隊は蠢々たる地上の影を顧みもせず、悠々として南へ去る。かくて前後一二里に互る大軍は、僅

仰ぎ見る事すら敢へてしない

佐多岬  
大隅半島の突端で九州の最南端に當る。

フィリッピン(比律賓)臺灣の南方にある群島

弱冠にして

少な殿軍を除けば、時餘にして全く通過し、それより二三里を距てた地に蜿蜒として南方の空を壓する。五千尺以上の山脈を眼下に見、進んでは佐多岬の燈臺を兒戲と觀て、洋々たる大洋を、昨日も今日もと南へ越えて行くのであらう。目的とする所は臺灣か、フィリッピンか、但しは南洋の島々か。  
「鷹が渡る。余は弱冠にして家を出て、故郷の秋に背く事ここに十幾年である。しかし、身はいづこの境にあつても、この一語を想ひ起せば、直ちに故郷の遠山近嶽、山村水郭を背景として、渡鷹の大軍が一大パノラマの如く眼前に浮ぶ。眼を閉ぢても去らぬ。それと共に、幼時の秋の記憶は、余の腦裡に黒潮の如く渦巻き、渡鷹の如く廻轉する。」

石川啄木  
詩人、歌人。名は一。岩手縣の人。大正元年歿、年二十七。

六 思郷のこゝろ

石川 啄木

やまひのごと

思郷のこゝろ湧く日なり

目にあをぞらの煙かなしも

ふと思ふ

ふるさとにゐて日毎きゝし雀の鳴くを

三年きかざり

それとなく

郷里のことなど語り出でて

秋の夜に焼く餅のほひかな

馬鈴薯のうす紫の花に降る  
雨を思へり  
都の雨に

やはらかに柳あをめる  
北上の岸邊目に見ゆ  
泣けと如くに

はたはたと黍の葉鳴れる  
ふるさとの軒端なつかし  
秋風吹けば

北上  
北の上川。奥羽地方  
第一の大河。岩手  
縣に發し、中央部  
を南流し、宮城縣  
に入流し、石巻市の  
東で海に入る。

なまり(訛)

岩手の山  
岩手山。岩手富士、  
南部富士とも呼ば  
れる。盛岡市の北  
西二四キロメートル。  
海抜二〇四一  
メートル。

ふるさとのなまりなつかし  
停車場の人ごみの中に  
そをきくにゆく

神無月

岩手の山の  
初雪の肩にせまりし朝を思ひぬ

ふるさとの山に向ひて  
言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな  
わかれをれば妹いとしも

赤き緒の

下駄など欲しとわめく子なりし

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

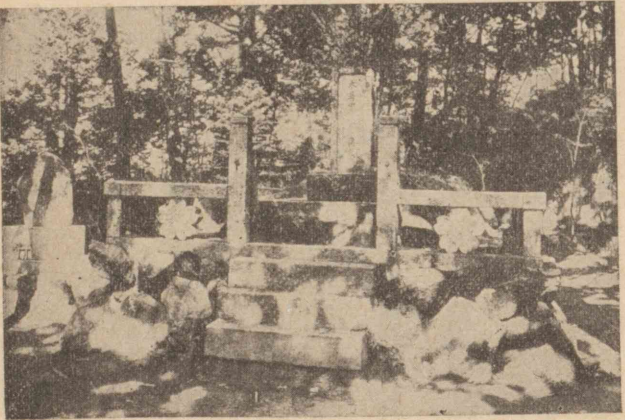
三步あゆまず

### 七 本居翁の遺蹟

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く楽しさ。早稲田は既に刈盡したが、晩稲田は金色に波立つて、豊年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生

面を吹かせて

山室  
三重縣飯南郡花岡  
町にある山。



本居宣長の墓

くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊のまじつてゐるまばらな小松原の路を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、御墓はあそこの山の茂みの所です。と車夫の語るのを聞きながら、何時しか山室に著いた。

を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた

清らかに珍しい  
しひ(椎)  
妙樂寺  
山室山の麓にある  
小寺

平田篤胤  
江戸時代末期の國  
學者。秋田の人。  
天保十四年(二五  
〇三年)歿、年六  
十八。

…なりぬとも  
魂はおきなのもと  
に行かなん

目や耳には清らかに珍しい。杉、松、しひなどで小暗い路を凡そ四五町も上つた所に、浄土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には深い関係のある寺である。それから右へ左へと九十折を喘ぎくく六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪くらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本、「本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、平田篤胤大人の

なきがらはいづくの土になりぬとも

魂はおきなのもとに行かなん

と刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられた事はない。しかも數多の門弟子のうちで、獨り翁の傍に侍つてをられるのは、さぞかし満足な事であらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで住僧に宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏してゐる。

やま室の山に千年のやどしめて

風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事のない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に

…こそ見め

額づいて感慨は眞に無量であつた。

百歳の世は隔つれど教へ子に

かずまへませと拜み額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價值と偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程偉大なものはない。

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張などの崎々、山々、近くは松阪町を眼下に見る。富士の山も何時もはちやうどあのあたりに見える。と、ホテルの主人は指さし

作りつゝある

松阪町  
今は松阪市。

城址  
松阪市街の西傍にある丘陵。

ていねい(丁寧)

人をして襟を正さしめる

おそれ(虞)

た。千古に卓越した偉大な學者の奥墓として、まことにふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此所の眺望もまことに美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをりく、此所に遊ばれたのである。

松阪へ歸つて城址の公園に行く。此所に鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのままに保存されてゐる。また新しい倉庫には、翁の自筆の草稿遺愛の物醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本もていねいに、綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災のおそれもあ

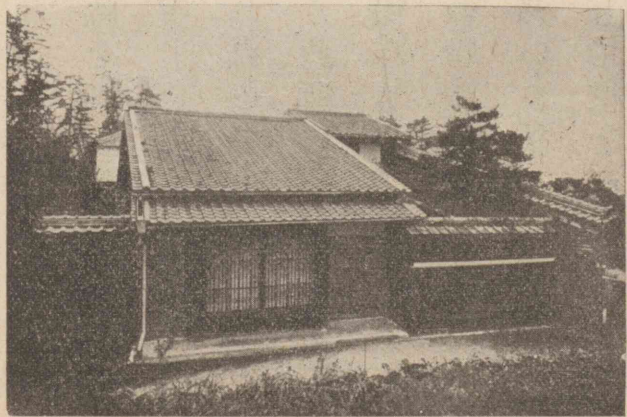
保存會で

本居清造  
今の戸主。翁五世  
の孫。

かまど(竈)

梯子段を上ると

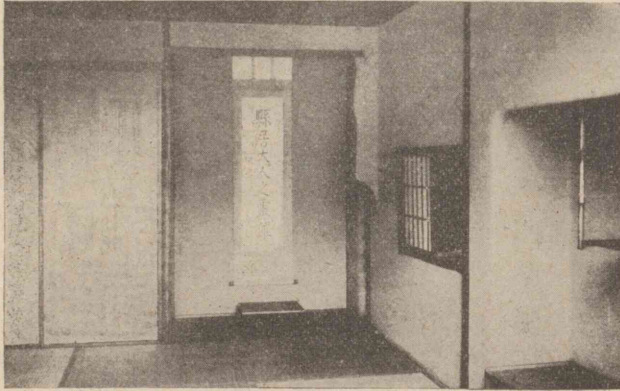
るから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。しかし、庭の樹木置石まで、一切舊態を存するやう苦心したといふ事で、本居清造といふ表札まで、そのままになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所も、舊のままの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繋がれてかゝつてゐる。これは模造品で、本品は陳列庫にある。これが



七 書齋の長宣

思はれて

ワイマール  
ドイツの一都會。  
ゲーテ  
ドイツの詩人。(西  
紀一七四九—一八  
三二年)  
シルレル  
ドイツの詩人。(西  
紀一七五九—一八  
〇五年)



齋書の長宣

即ち翁が一切の著書を述作された場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から射しこむ夕日は、さぞ堪へがたかつたらうと思はれて、この質素な家居のさまが、愈翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマールで、ゲーテやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の状態との對比を面白く感じしたが、この鈴屋の遺蹟には一層その感を深うした。ゲーテ、シ

今や

ルレルの舊宅を見た時には、日本にもかういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、まづこれを翁の舊宅に見る事を得たのは、まことに悦ばしい事である。

この公園は四望豁然、パノラマを見るやうで絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇、松阪町民の誇は、翁の遺蹟に越したものはない。

城の大手門を出て數十歩、縣社山室山神社がある。社殿、瑞垣が神宮風の様式であるのを、一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲をして

東郷大將  
海軍大將、元帥。  
侯爵。名は平八郎。  
鹿兒島縣の人。昭和  
八年九月歿、年八十

ゑる(彫、鐫)  
卷々ぞ...花には  
ありける

八波則吉  
國文學者。第五高  
等學校教授。明治  
九年福岡縣に生れ

享保十五年  
第百十四代中御門  
天皇の御代。二三  
九〇年。

ある。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も返咲を見られて、さすがに本居翁の郷土故、櫻は一年中咲くのだから、と言はれたといふ事である。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ

風に知られぬ花にはありける

自慥文

本居宣長の母

八波則吉

敷島の大和心を人間は

朝日に匂ふ山ざくら花

この有名な歌の作者本居宣長は、伊勢松阪の人で、父は三四右衛門、母は勝子、宣長はその長男として、享保十五年五月七日の出

本居宣長の母(自慥文)



水分神社

山嶽の分水嶺に多く祀られてゐる。こゝは奈良縣吉野郡吉野水分山にある吉野水分神社。

御願立て神佛に祈願を立てること。

寛保二年

第百十五代櫻町天皇の御代。二四〇二年。

惠勝大姉

勝子の法名。

道樹

父の號。姓名は小津三四右衛門定利。

生です。出生に就いて面白い話があります。宣長の両親は子供欲しさに、大和國の水分神社みづまりに御願立てをしました。若し男子をお授け下さいましたら、その兒が十三になる年連れて御禮參をいたします。とお祈りをして出来たのが宣長です。そこで寛保二年、宣長が十三歳の七月に、母の勝子が宣長を連れてはるく、吉野の水分神社へ御禮參をしました。父の三四右衛門は、その前々年、宣長十一歳の年既に病歿してゐました。で、勝子が宣長を連れて行つたのです。その序に大和の御嶽へも參詣して、無事に歸宅しました時、惠勝大姉は涙落してぞ喜び給ひける。と宣長は書いてゐます。また、道樹君の御事いかに思し出でけん。とも書いてゐます。神様にお祈りして授つた愛兒を連れて、夫婦そろつて御禮參が出来たら……と、さぞや勝子は萬感胸に迫つた事でせう。

さて、勝子は宣長が十一の年から寡婦となつて、宣長をはじめ

あきなひの筋にはうとく商賣の方面にはうとくらしい。

封建時代

土地を分割して諸侯が分立してゐた時代。

果斷

物事を思ひきつて行ふこと。

因循姑息

一時のがれをしてぐづぐづしてゐること。

二男二女を女の手一つで育てあげました。財産と言つては、遺産が四百兩ばかりありましたが、それも親族の店に預けられて、その利子だけで、一家の生計を立てなければなりません。宣長の家は父祖代々商家でしたが、宣長は幼時から書を讀む事をのみ好み、あきなひの筋にはうとく家業を繼ぐ事は不適當らしく見えました。けれども今日と違つて、士農工商それ／＼世襲の封建時代に父祖傳來の家業を改める事は、なか／＼容易な事ではありませんでした。殊にその嗣子に於てこれを實現させる事は頗る難事でした。しかし、聰明にして果斷な勝子は、敢へてこの難事を決行しました。即ち商家の嗣子彌四郎事、後の鈴屋本居宣長翁を學者になすため、京都へ遊學させたのであります。若し翁の母が世の常の婦人であつて、因循姑息翁を木綿問屋の若旦那たらしめたなら、日本の國學及び國學界に絶大な貢獻をな

古事記傳 四十八卷。古事記を註釋したもの。皇風發揚 我が皇國のならはしを盛んならしめること。

時勢を洞察する 世のなりゆきを見ぬく。

景山 堀景山。名は正超。安藝侯の儒臣。寶曆七年(二四一年)歿。武川幸順 京都の人。小兒科の名家。安永九年(二四四〇年)歿。年五十六。

した古事記傳、その他皇風發揚の著書數十種を我々は永久に見る事が出来なかつたのであります。翁は後年當時の事を顧みて、次のやうに語つてゐます。「すべてこの惠勝大姉は女ながら男にまさりて、心はかくし、くさとくて、かゝる筋の事もいと賢くぞおはしける。」しかも勝子の尊いところは、宣長に醫學をも併せ修めさせた事であり、當時の時勢を洞察して、學者だけでは、或は將來生計の道に窮する事があるかも知れない、さうした時には卻つて好きな學問をする餘裕がないかも知れないと、かう考へて、儒學を景山先生に學ばせると同時に、醫術を武川幸順法眼に修めさせたのであります。宣長の一家は前にも言つたやうに、わづか四百兩の利子だけで暮して行くのでしたから、非常に貧しいものでした。それに宣

遊學 遠方に行つて修學すること。

慘澹たる工面 非常に苦心して工面すること。

そもじ お前。

鞭撻 はげますこと。都會の誘惑 都會には田舎から出た人を誘惑するやうな機會、機關が澤山にある。それをさしていふ。

長を遊學させて、なほ三人の子女を養育する勝子の苦心は、並大抵ではありませんでした。家財を賣り、極度の節約をなし、なほ足りないと、ところは賃仕事で補ふなど、慘澹たる工面をしながら、學資の支給は十分にしていやつて、宣長に毫も後顧の憂なからしめたのであります。宣長の遊學中、勝子が寄せた書翰の一節に次のやうなのがあります。

……随分々々無事にて心強く思ひ、外の儀に心移し申さず、唯一筋に醫者の方心掛け、申すまでもなく候へども、人間心一筋を強く、道々を專一になさるべく候。こゝをもそもじ取損ひ、取外し申され候はゞ、何時もくく申す通り、一人の母この世より迷ひ申すべく候。

と、鞭撻の言、いかに宣長の心魂に徹した事でありませう。この母に對して子たる宣長が、どうして學業を怠り、または都會の誘惑

精進  
一心にはげむこと。

に陥るやうな事が出来ませう。在京五年四箇月の間に刻苦勉勵して、醫學の修業も國學の基礎も、豫期以上の成績を擧げる事を得ました。歸郷後は、まづ醫術を開業して専ら生計の道を立て、その餘裕で好きな國學に精進しました。

さすがに勝子は賢明でした。宣長に終生、學を以て身を立てさせようとは思ひながら、學問だけでは一家の經濟を支へる事が出来がたいのを察して、まづ「たゞ一筋に醫者の方心掛け」と注意したのであります。果せるかな、宣長は醫を生業としてゐた爲、好きな學問に對する研究の時間と費用とをかち得たのであります。宣長の手記に、

「われ若し醫師の業を始めざらましかば、家の産絶果てなましを、惠勝大姉の計らひはかへすくもありがたく覺ゆ。」

と書いてあるのを見ても、いかに勝子の計らひが效を奏したか

春庭  
宣長の長子。國學者。文政十一年(二四八年)歿、年六十六。

春村  
宣長の次子。由來。

涙の鞭  
かはいさうだと思ふ情を抑へて、叱りはげますのをいふ。

新井白石  
江戸時代中期の學者、政治家。名は君美、享保十年(二六九年)歿、年六十九。

湯島  
今東京市本郷區。

癸未の年  
元祿十六年。

を知る事が出来ませう。かくて勝子は、宣長が古事記傳の稿を起してから五年目の春、春庭、春村二人の孫の顔を見て、六十四歳で眠るやうに世を去りました。

由來、寡婦の育てた子に偉人が多いのは、慈母の愛に、亡き父の嚴が兼備はるからであります。なでるばかりが愛ではありません、眞の愛には涙の鞭も必要です。つまり、優しい中の勝氣が女性の美德であり育兒の祕法であります。

(高きに登る)

### 八地 震

新井白石

我初め湯島に住みし頃、癸未の年、十一月二十二日の夜半、過ぐる程に、地夥しく震ひ、始めて目覺めぬれば、腰の物ども

挿圖  
これは昭和二年但馬地方を襲つた震災の時、道路に出来た龜裂である。

息切れん事もあらん

取りて起出づるに、此所彼所の戸障子皆倒れぬ。妻子どもの臥したる所に行きて見るに、皆々起出でたり。屋の後の方は高き岸の下に近ければ、皆々引具して、東の大庭に出づ。地裂くる事もこそあれとて、倒れし戸ども出し並べて、その上にをらしめ、やがて新しき衣（きぬ）に改め、裏打ちたる上下の上に道服著て、我は殿に参るなり、供の者二三人ばかり來れ。その餘は止まれ」と言ひて駈出づ。道にて息切れん事もあらんと思ひ



地 震 の 惨 状

神田の明神  
神田神社の舊稱。今東京市神田區宮本町鎮座。府社。

越前守詮房  
間部詮房。徳川家宣の側用人。高崎城主。享保五年（二三八〇年）歿、年五十四。

しかば家は小船の大きな波に動くが如くなるうちに入りて、薬器尋ね出し、傍に置きつゝ、衣改め著し程に、かの薬の事をばうち忘れて走り出でしこそ、恥（はづか）づかし（か）きことに覺ゆれ。

かくて走する程に、神田の明神の東門の下に及びし頃、地また夥しく震ふ。こゝらの商人（あきんど）の家は皆々うち明けて、多くの人の小路に集りゐしが、家のうちに燈の見えしかば、火こそ出づべけれ、燈うち消すべきものをと呼はりて行く。

こゝかしこの天井落ちかゝりし所を過ぎて、我は常に伺候する所に参りしに、今の越前守詮房朝臣の、此方の方に來

つゝが(恙)

東の屋の倒れかゝりしあり

大先は坐せしむるは老手等

火熾りならんには御座を移さるべし

るに行會ひて、御つゝがもあらせ給はぬことを聞き、かゝる時に候へば、推參し候。と言棄てて常の御座所に參るに、そのひさしの内に東の屋の倒れかゝりしあり。近習の人々は、南の庭上に立ちあたり。上にはあなたの庭におはしますなりといふ。戸田、小出、井上などのおとなたちも、此所に入來る時は庭上に立ちぬれば、五十嵐といひし人にいひ語らひて、御ひさしに敷かれし疊十疊ばかり庭上におろして、皆々をその上に坐せしむ。地震ふこと頻りなれば、坐せし後の池の岸崩れくゞて、平らかなる池も狭くなれり。

かゝりし程に酒井左衛門尉忠眞、仰せを蒙れりとて入來りて火を防ぐ。火熾りならんには、御座を移さるべしなど聞ゆるに、御袴ばかりに御道服召されて、常の御所の南面に出で立たせ給ひ、某が侍ふを御覽じて召す。御縁に參りしかば、地震の事つぶさに問はせ給ひて後に、奥に入らせ給ひぬ。

上野  
今東京市下谷區上野公園

かゝりし程に、再び先の所に出でさせ給ひ、某を召して、我いとけなき時に、上野の花見し者どもの群れおしを見しに似つるかな。と仰せられて笑はせ給ひぬ。とかくせし程に、日已に午の半ばにもなりぬべき頃、また出でさせ給ひて、某を召す。參りしかば、妻子どものこと、その後のこと聞えしにや。と仰せあり。よべ參りし後は、此所のみ侍ひて、それ等の事も承らず。と申すに、とくゞ家に歸るべし。と仰せ下されし

家  
者に  
ども  
残せ  
し

かば、罷り出て、供の者に尋ね會ひて、「よべのまゝに待ひしにや」と問ふに、「今朝とく家に残せし者どもの來り代りぬれば、家に歸りて物食ひ、また參れり」と言ふ。これによりて妻子どもものつゝがなかりし事を知りぬ。

明けの日、藩邸に參りしに、殿屋悉く傾きたれば、東の馬場に假屋うたせ給ひておはします。地をほ頻りに震ひぬれば、必ず火起りぬべしと思ふに、我が塗籠の傾くまではなければ、壁の所々崩れ落ちし數多あれば、崩れし土水に浸して、その破れを修め塗らしむ。思ひしことの如くに、同じき二十九日の夜に入りて火起れり。資財悉く塗籠に納めしかと思ふ

土  
火の  
事な  
ばの  
も  
測り  
が  
内  
間  
に  
開  
け

に、地震ふ事止まず。塗籠倒れん事もはかるべからず、また修め塗りし所の土未だ乾かず。火勢熾りにして、新舊の土の間開けなば、内に火の入らん事も測りがたく、やがてそのほと



新井白石の地に坑掘らせて、賜はりしところの書ども、また手づから抄録せし物ども、塗籠より取出して、かの坑の中に入れ、疊六七

りかけて家を出づ。こゝかしこにて火の爲に道を遮られて、火勢やゝ衰へし時に、その焼過ぎし跡の道を経て、家に歸りて見るに、かの書を埋みし坑に近き岸の上なる家の焼落ち

消えずぞありける

たるが、火未だ消えずぞありける。頻りに水を注ぎて火をうち消して、焼けたる家の柱など取除けて見しに、その家の落ちぬる時に、かの埋みし所の土をばうち散らして、上に重ねし疊の焼失せ、下なる疊に火既に付きし程に歸り來りけるなり。塗籠は思ひしに似ず倒れもせず、焼けも失せず。されば始め坑うがち、書納めし事は、徒に力を勞せしなりけりと言ひて笑ひぬ。

(折たく柴の記)

大町桂月  
文學者。名は芳衛。  
高知縣の人。大正  
十四年歿、年五十  
七。

角筈  
今東京市淀橋區角  
筈。  
大久保  
同區大久保町。

九 田園雜興

大町桂月

角筈つのはすに住みし頃は三兒ありき。大久保にて一兒を失ひたるが、今なほ四兒あり。上の三兒は男にして、末の一兒は女な

り。

我、性植物を好めども、動物を好む事更に甚だし。花美なれど、久しくこれに對すれば變化なきにあく。動物には變化ありて、終日相對してあかず。されど四兒をもり立つるに手のかゝるを以て、みだりに多く動物を飼はず。鶏を飼ひしが、犬常に來り襲ひ、その一つ遂に犬に奪はれたり。かはいさうに思ひて、飼ふ事を止めぬ。小池を掘りて鯉、金魚を飼ふ。我執筆に倦みて庭へ出づる時は、まづ必ずこれに對す。その泳ぐさま何となく趣味あり。されどそれを見て喜ぶ小兒のさまを見れば、なほ一層の趣味を感ず。  
移り住みてより二三箇月の間は、たゞ庭園を逍遙する事

變化なきにあく

あかず

みだりに(猥、妄)

逍遙する事が面白  
かりしも

捕へたり：たり  
：たりする

が面白かりしも、馴れては初のやうには珍しく思はず。小兒をつれに行けば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒の爲に蟬を捕へたり、栗を拾ひたり、また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙、常に愉快なるを覺ゆ。

目的のあるところ活動あり。活動あるところ常に新趣味あり。世に生れて目的のなき者は、遂に人生の趣味を解せざるべきなり。

家庭に小兒あるは庭園に花あるが如し。四兒もあれば閑をつぶすに餘りあり。なるべく戸外に運動せしめんとて、まづぶらんこ二つ設けぬ。

生れて一年半ばかりになれる女の兒も兄の眞似して、わ

解せざるべきなり

ぶらんこ(鞦韆)

こよなき楽しみ

らびの如き手に麻繩しかとつかみて運動するを、こよなき楽しみとするを見るが、こよなき楽しみなる親の心、子もたぬ人は知らざるべし。

ひとり逍遙して面白きもの見附けては、兒にも見せんとて急ぎ戻り來ることあり。兒庭に出でて久しく戻らざるに、何をなしてゐるにかと懐かしくなりて、其所此所尋ねまはり、兒の名を呼ぶ聲を、空しくこだまに答へさすることも屢なり。

暇あるごとに庭園を逍遙するにつけて、樹木のさまを見盡し、蟲を見盡しぬ。

枝ぶりの面白き木は松、梅、楓、柿、櫻、百日紅などなり。松は庭

何をなしてゐるにか



花をつくれば

園に附物なり。種類多く、枝ぶりもさまざまなるが、頑健のやうにて何となく卑し。梅はあばずれ女の如し。されど花をつくれば憎らしくはあらず。百日紅の枝ぶりは、垢ぬけしたる女のやうなれど、皮の剥ぐるが疵なり。楓は勇肌いさみの男の如く、柿は實のみ賞せらるゝものなれど、我その枝ぶりに一種の風情あるを愛す。杉はばか正直の人のやうなるが、多く立並べば莊嚴なり。木の花にては櫻が花主はなぬしなる事言ふまでもなし。草花にては我朝顔を愛す。その一朝にして落つる事、最も面白し。盛り久しき百日紅は人にあかるべし。されどその花の色、桃李にまされり。概して花の美なるは實甘からず、實の甘きは花美ならず。たゞ桃李は二つながら併せ得たれど、花

あかるべし

ものこそよけれ

以爲へらく

たい望む……あらん事を

賣物となりをれば

は梅櫻に如かず、實は梨柿に如かず。常磐木、四時葉をつくれど、また常に枯葉を落す。木は花をつけたり、紅葉したり、兀然こうぜんとして骨立したるものこそよけれ。

衣食住のうちにて我以爲へらく、衣は垢つきをらずして、冬寒からざるだけならば十分なり。我他に望なし。食物もからだ相當に滋養を取れば足れり。必ずしも美味あるを望まず。我はたゞ望む、家は壯麗ならざるも、さつぱりして、まはりこみ合はずゆるやかにして、樹木あり、眺望あらん事を。この望は角筈に住みて稍かなひ、此所に來りて最もかなへり。一生住まばこの上もなけれど、我が所有にあらず、賣物となりをればいづれ買ふ人ありて追出されん事、角筈に於ける如

あつけなければ

くなるべし。されど事の終りたる後より見れば、一二年もあつけなければ、十年もあつけなし。一生もまたあつけなし。一日住めば一日の願足り、一年住めば一年の願足る。買ふ人あらんまでは、余にとりては浮世の樂土なり。

一〇 奥村五百子

小野賢一郎

「半襟一かけを節約せよ」と、東京九段坂下の街頭で叫んだ一女性があつた。この叫は、やがて百數十萬人の日本女性の大團結を作る第一聲となり、今日の愛國婦人會が生れたのである。九州唐津高德寺の娘奥村五百子こそ、實にこの生みの母である。

小野賢一郎  
東京中央放送局文藝部長。俳人。明治二十一年福岡縣に生れた。本文は特に生じたもの。爲に新作したもの。  
九段  
麹町區。坂上に別格官幣社靖國神社がある。  
唐津  
佐賀縣唐津市。

高杉晋作  
幕末の勤王家。長門萩の藩士。名は春風。慶應三年(二十二年)歿。年二十九。

野村望東尼  
名はもと。幕末勤王の志士と共に活躍した。慶應三年(二十二年)歿。年六十二。

西郷吉之助  
名は隆盛。維新の功臣。南州と號した。明治十年(二十五年)歿。年五十一。

天野爲之  
法學博士。早稻田實業學校長。安政六年(一八五九年)佐賀に生れた。早稲田大學の創設に盡力した。  
危急を救つた事もあるれば  
光州  
全羅南道。今農産物の集散地。

五百子は物騒な明治維新の際に、父了寛の爲編笠に朱鞘の大小、義經袴に草鞋ばきといふ男装で、長州の志士高杉晋作の許へ使した事もあつた。また筑前の女傑野村望東尼や、西郷吉之助とも國事を談じた事があつた。二十二歳で同藩同宗の僧に嫁いだが死別後、水戸藩士鯉淵某と結婚して子まであげ、賃仕事などして一家を支へてゐたが、感ずるところあり、斷髮して夫と別れ、國事に奔走するやうになつた。國會開設最初の選舉運動に参加して、壯士の白刃を尻目に候補者天野爲之の危急を救つた事もあれば、郷土の爲鐵道敷設や開港貿易に奔走した事もあつた。日清戦争後は五百子一流の植民政策を斷行し、朝鮮光州に日本村を建設し

百名から移住させ

て實業學校を建てた。蠶業教師、劍客、大工、左官、洗濯婆さんなどを百名から移住させて、土地開拓と農事の改良とをはかつた。この間さまざまの艱難に遭遇したが、少しも撓まず、貧困と迫害と戦ひ續けた。

明治三十三年南支那を視察し、一旦歸朝したが、義和團事件が勃發したので、東本願寺の慰問使と共に支那へ赴き、天津、北京の間に苦難の旅を續けて、親しく日本の兵士を慰問した。丘の上で「日本萬歳——」と叫んだ女の化物を見たといふうはさが兵士の間には傳はつたのは、一行が北京に到着した夕方の事であつた。この時の兵士の辛勞を見聞して、女性は家の留守ばかりではない、國家の爲出征した兵士の留守

義和團事件

支那清末に起つた、明治三十三年、山東省で、國宣教師及び基督教徒を迫害し、北京に侵入り、外國公使館を圍んだ事件。

天津

河北省。北平の東南。北平の門戸をなす、北支那第一の商業地である。開港場である。

北京

今は北平といふ。元以後清まで、歴朝の帝都であつた。

うはさ(噂)

も臺所も守らねばならぬ」と決意したのであつた。

「半襟一かけを節約して、醜金せよ」といふ叫は、全國の女性



奥村五百子

總動員の共鳴を得て、遂に愛國婦人會の結成となり、出征兵の家族の爲、傷病兵の爲、戦歿兵士の爲、温かい扶助の手を加へるやうになつた。五百

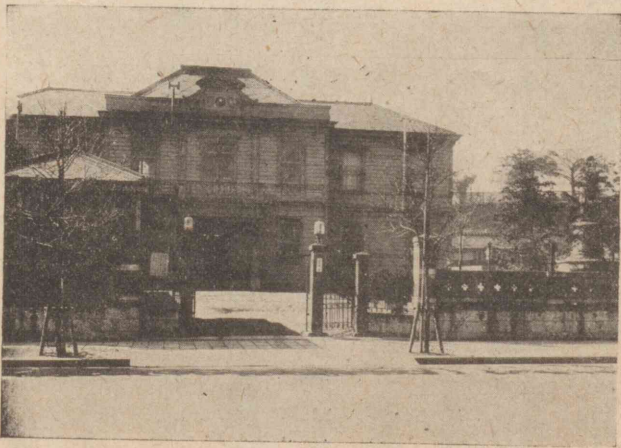
子の半襟一かけ演説は全國津々浦々に及んだ。

日露戦争に際會して愛國婦人會は愈、盛大になり、活動は益、目覺しくなつた。五百子は袴をはき、草鞋をはいて、滿洲の

二百三高地  
高さ二〇三  
メートル  
あるのでいふ  
日露戦役の際の激  
戦地。

野に同胞を慰問し、戦死者の靈を弔つた旅順の二百三高地では、前から引かれ後から押されて頂上を究め、墓標の前で讀經回向した。

滿洲各地を巡回慰問してゐるうち、持病の胃腸病が再發して、やつと東京へ歸つたが、歸るや否や病を推して、九段偕行社で巡回慰問報告會を開き、火のやうな辯舌で一座を感動させた。



愛國婦人會本部

偕行社  
陸軍將校の集會研  
究の機關。

歸るや否や

宮殿下  
閑院宮載仁親王妃  
智恵子殿下。

近衛篤磨  
政治家。公爵。貴  
族院議長。樞密顧問  
官等に任ぜられた。  
明治三十七年  
(一五六四年)歿、  
年四十二。

うちかけ(襦袢)

もろい(脆)

明治三十九年十一月、病氣の爲愛國婦人會本部から退隱する事になり、宮殿下台臨のもとに盛大な送別會が開かれた。五百子は近衛篤磨公から戴いた緋色の地に金絲の菊模様のうちかけ、白羽二重の袷、錦の袋に入れた短劍を帶して列席した。その席上、一生の思出にと、謠曲船辨慶の一節を謠ひつゝ、日の丸の扇をかざして一さし舞つた。

明治四十年二月七日、京都帝國大學附屬病院で死去したが、臨終まで口のうちに念佛を唱へ續けて、片手を胸に合掌の形をしてゐた。

五百子は一面極めて男性的であつたが、君國の爲思想界の爲、軍人遺族の爲、孝子節婦の爲には、何時も涙もろい女性

としての半面をもつてゐた。  
東京九段坂下愛國婦人會の廣場に立つ切髪被布姿のか  
の女の銅像は、年と共に榮え行く生みの子愛國婦人會の成  
長を表し得ぬ微笑を含んで、何時までも何時までも見守り  
續けて行くであらう。

一一 美しい心

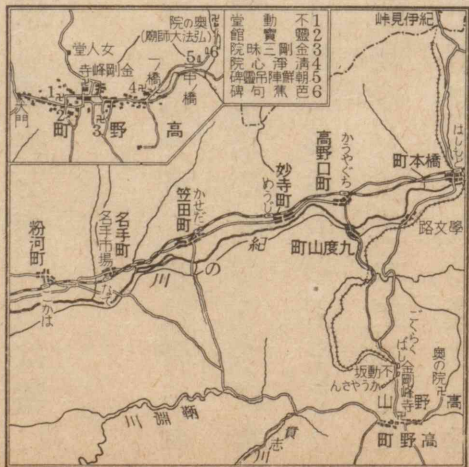
吉田絃二郎

紀伊見峠を越えれば山は展げ、紀の川を挾んで秋の野は  
靜かに横たはる。紀の川を高野の方へ渡鳥の群が飛ぶ。

高野口、妙寺、名手市場、粉河などの町々が、紀の川に沿うて  
わづかに黒い町の屋根のみを、熟れきつた稻田の上に見せ

吉田絃二郎  
小説家。名は源次郎。明治十九年佐賀縣に生れた。  
紀伊見峠  
和歌山縣伊都郡  
紀の川  
同縣同郡。上流は吉野川。和歌山市の西北で海に入る。  
高野  
高野山。同縣同郡。海拔九〇〇メートル。山頂に金剛峯寺がある。  
高野口  
同郡高野口町。  
妙寺  
同郡妙寺町。  
名手市場  
那賀郡名手町の字。  
粉河  
同郡粉河町。

てゐる。幾筋もの山路が一樣に午後の日を浴びてゐる。路は杳然として煙つてゐる。遠い山に入る路を見るのははかないものである。何時とはなしに私もまた、をりからの満山の紅葉を愛で、幽谷に小鳥の音を聞きつゝ、高野の山路をたどつてゐた。私と前後して歩く夫婦づれの遍路を見た。不動堂の前の苔むした石に休んでゐた時、遍路は黙禮しながら通り過ぎて行つた。子を失つた悲歎に耐へないで、二人連立つて歩いてゐるのであらうか。本來無東西、何處在南



北の笠の文字を掠めるやうに、音もなき時雨は、やがて通路の寂然たる姿を包んでしまつた。

夜は清浄心院の奥深く維盛を思ひ、秀次を懐ふ。山は霜に瘦せて、軒に星の寒さを感じる。

朝まだ暗いうちに起きて、かけひの水を汲む。水は骨を刺す。御堂の方から、既に誦經の聲が響いて来る。朝のうちに高野の寺々に詣り、午後は雛僧に誘はれて、杉並木の下をくゞつて奥の院に詣でる。奥の院への兩側の大杉の木立の間に、光秀三成の爲の供養塔を見出した。不運な二人の武將の爲に捧げられた施主さへ知れぬ二基の塚を見た刹那、私は高野を訪ねた事をありがたと思つた。凡そ世に捨てられ、顧

維盛 平維盛。重盛の嫡子。屋島を遁れて高野山にて剃髮したといはれる。年二十五。

奥の院 一の橋から摩尼山に至る二キロメートル餘の間。

光秀 明智光秀。  
三成 石田三成。

みる者もない人々の爲に捧げられた塚程、人の心の麗しさを語るものはない。苔暗くたそがれる頃、墓前に佇立して去る事を得ないのは、私一人ではあるまい。

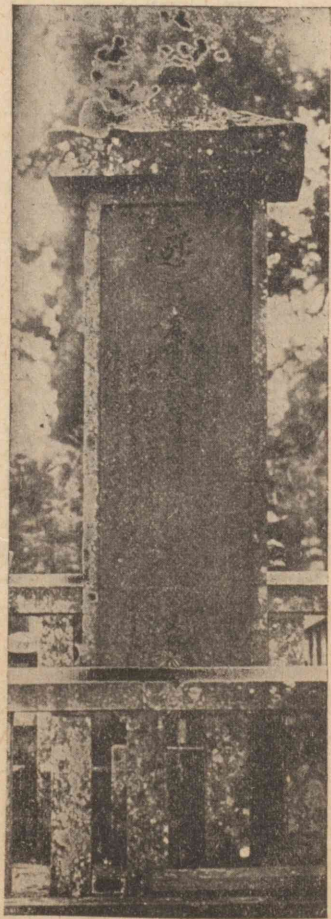
杉の並木のほとりには、芭蕉の「父母のしきりにこひしき」の聲の句碑がある。

更に慶長四年、島津義弘父子によつて建てられた朝鮮陣弔靈の碑を見るに至つて、旅人は古への日本武士の優しい心のありがたさに魂を打たれる。この碑が一基ある爲に、高野の奥の院はどれ程印象深くされてゐるか知れない。

慶長二年八月十五日に於ける全羅道南原の役、及び同年十月朔日慶尙道泗川の戦に於ける彼我數萬の戦死者の

慶長四年 二二五九年。第百七代後陽成天皇の御代。  
島津義弘 薩摩、大隅、日向三國の太守。義久の弟。元和五年(一六二〇)歿。年八十五。  
義弘の子は忠恆。

追福の爲に捧げられたもので、敵身方闘死軍兵をして皆佛道に入らしむといふ文字が見出される。まことに美しい武士の情ではないか。戦ふは義である。だが、討つも討たれるも



朝鮮陣弔靈碑

伏見鳥羽の戦  
明治元年(二五二八年)正月、徳川慶喜と薩長の兵との戦。

その主、その國の爲のみであつて、何の私怨があらう。

蓮月尼の伏見鳥羽の戦に際して歌つた

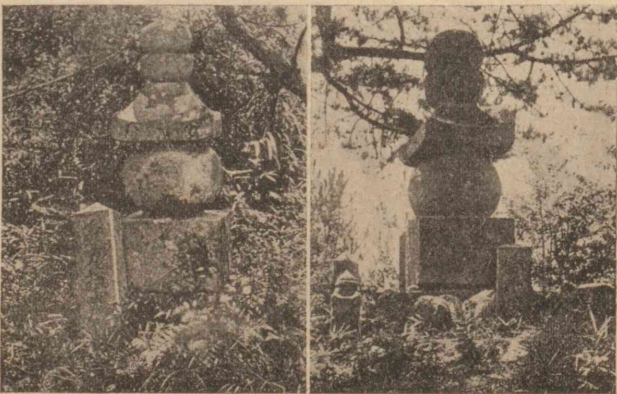
きくまゝに袖こそぬるれ路のべに

さらす屍は誰が子なるらん

といふ歌を思ひ出さざるを得ない。

謙信の鹽を敵に送つた物語は餘りにも有名である。阿倍野の戦に渡邊橋からせき落されて溺れる足利勢を救つた正行の慈悲心は、かの「假のちぎりを」の和歌の心と共に、不朽に傳へらるべき日本武將の心がけてある。

攻めるも人、攻められるも人、殺すも人の子、殺されるも人



身方墳

寄手墳

阿倍野  
今大阪市住吉區。  
正平二年(二〇〇七年)十一月、楠木正行は細川顯氏、山名時氏の勢を此所に破つた。

假のちぎりを  
「とても世にながらふべくもあらぬ身のかりのちぎりをいかで結ばん」

の子である。その父、その母の悲しみを思はゞ、誰か勇士の屍を秋風の吹くにまかせる事が出来よう。

河内國赤阪の城のほとり、二基の身方墳、寄手墳は誰が建てたかは知らぬが、此所にも美しい人の心が現れてゐるではないか。

さるにても、人は何故に人を殺さなければならぬか。墓邊日暮れて、蕭條たる山氣迫る。

「今年の夏夜の八時頃、奥の院の前の橋のほとりで佛法僧を聴きましたよ。」

と言ひながら、雛僧は足駄の音高く石だたみの上を歩いて行つた。

きぬた(砦、礎)

雨催ひの空には星も稀であつた。

「寒いですな今晚は……」暗い庫裏を通り過ぎて湯殿へ通ふ雛僧たちであらう、聲までが凍りさうな寒さである。

何處かできぬたを打つ聲がする。かなり急調なきぬたの打ち方である。山深く住む人たちのわびしい心も思ひ遣られる。

寢床に就いてもなかくに眠れない。

「寒いですな……」私は再び庫裏の廊下を歩く雛僧たちの聲を聴いた。

廣い御堂に響く幽かな柝の音は、霜よりも寒い。



湯淺元禎  
江戸時代中期の儒者。字は文祥、號は常山。岡山藩士。天明元年(一八四一年)歿、年七十四。

出しければ  
聞きし人の……申しければ

七重八重云々  
後拾遺集、中務卿兼明親王の作。

一二 古名將の學問

湯淺元禎

太田持資は上杉の家老なり。鷹野に出でて雨に逢ひ、百姓の家に入りて、蓑を貸し候へ」と言ひしに、若き女、ものは何とも言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花をくれよ」といふ事にてはなし」とて、腹立てて歸りしに、これを聞きし人の、「それは

七重八重花は咲けども山吹の

みのひとつだになきぞ悲しき

といへる古歌のこゝろにて、蓑なしと申す事を、花もて知らせ申したるなり」と申しければ、持資おどろきて、「我これ程の

これ程の事だに知らで

劣れる

寄せにけり

出しゝに

張りたり

事だに知らで、百姓の娘に劣れる事口惜し」とて、それより書を讀み歌に志を寄せにけり。

或時下總國へ軍を出しゝに、「山ぎはの海邊に山の上より石弓を張りたり。潮たゝひたらば通りがたかるべし。いかゞ」とありし時、をりふし夜半なるに、持資、いざ見て來らん」とて馬を乗出しけるが、そのまゝ歸り、「潮は干たり」とて、軍を押し通しけり。これは

遠くなり近くなるみのはま千鳥

なく音に潮のみちひをぞ知る

と詠める歌あり。それを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。

遠くなり云々  
僧曉月の作。

聞えたれば

……となり

暗さは暗し

また退口のきぐちに利根川を渡す時、これも夜半にて、暗さは暗し、いづこか浅瀬なるべきと口々に言ひけるに、持資

そこひなき云々古今集、素性法師の作。

そこひなき淵やはさわぐ山川の

あさき瀬にこそあだ波は立て

と詠める歌あり。波の荒き所を渡せと下知して、難なく浅瀬を渡りけり。

かくの如く、昔より武將は必ず學問に心を寄せ、歌の道を知りけり。

奥州の合戦に八幡太郎義家安倍貞任、宗任タカを攻めて、衣川の城に追詰めし時、きたなくも後を見するものかな。ものはんとて、

きたなくも後を見するものかな

衣のたては綻びにけり

と言ひかけしに、貞任しころを振向けて、

年を経し絲のみだれのくるしさに

と附けたりければ、義家つがひたる箭をさしはづしけりとぞ。かゝる烈しきをりにかく附けたる事、優に優しき事なるべし。

かくて義家上京の後、宇治の關白を訪うて軍物語しけるを、中納言ナカノリ匡房マサトモ聞きて、器量は賢けれども、軍の道は知らず。とつぶやきけるを、義家の郎等聞きて、憎き事申され候。と義家に申し、かば、義家子細あるべし。とて、匡房の中納言、車に乗りけるところへ参りて、會釋ありて、やがて弟子になりて學

宇治の關白  
藤原頼通。道長の長子。承元年(一七三四年)歿、年八十三。  
匡房  
大江匡房。學者。天永二年(一一七七年)歿、年七十七。

金澤  
今秋田縣仙北郡金澤町

雁の：おりとしけるが：飛亂れける

學問に心を寄せずばなどかゝる事を知るべき

蒲生氏郷

武將。文祿四年(二二五五年)歿、年四十。

松崎

今三重縣一志郡。天正年中蒲生氏の有となつた。

細川越中守

細川忠興。三齋と號した。正保二年(二二五五年)歿、年八十三。

問しけり。後三年の合戰に義家金澤の城を攻めし時、一行の雁の刈田の面におりんとしけるが、俄に驚き飛亂れけるを「兵法に鳥の起るは伏なり」といふ事あり。定めて伏兵あるべし。とて野の三方を取巻きしかば、案の如く三百餘の伏兵ありしを、攻破りけり。義家學問に心を寄せずば、などかゝる事を知るべき。

右大將頼朝和歌に心を寄せ、近き年信玄謙信兩人とも詩歌を好みけり。蒲生飛驒守氏郷は、伊勢の松崎十二萬石より、奥州會津百萬石を太閤より拜領し、奥州をきり鎮めたる無雙の猛將なりけれども、極めて和歌を好きけり。氏郷の家に佐佐木の鐙といへる名高き鐙ありけるを、細川越中守所望

しけるに、家來ども、これは名物にて候。別の似よりたる鐙進ぜられよ」と申しければ、氏郷

なき名ぞと人にはいひてありぬべし

こゝろのとはゞいかゞ答へん

といへる歌の心の恥づかしくて、かの鐙を贈りけりとなり。元弘の亂に菊池寂阿入道が、後醍醐天皇の敕命にて敵の城へ寄せける時、櫛田の宮の前にて馬のすくみたりしに、

ものゝふの上箭のかぶらひと筋に

おもふこゝろは神ぞしるらん

と詠みて、神殿の大蛇を射て、馬のすくみ直り、既に討死すべき時、故郷へ一首の歌を書きつけて遣しけるに、

なき名ぞと云々  
後撰集、よみ人知らず。

菊池寂阿

吉野朝の忠臣。名は武時。肥後の人。元弘三年(一九九三年)歿、年四十二。

櫛田の宮

櫛田神社。福岡市博多祇園町にある。馬のすくみたりしに

馬のすくみ直り

ふるさとにこよひばかりの命とも  
知らでや人のわれを待つらん  
と詠みて、忠義の爲に命を捨てけり。これ等皆文武の人と申すべし。

大將ばかりにもあらず、名高き士は皆書を讀み、學問し、和歌をも好きけり。梶原が一の谷にて、

ものゝふのとつたへたるあづさ弓

ひきては人のかへすものかは

と詠み、頼朝の奥州を攻めし時、白河の關を越ゆるに、梶原

秋風に草葉のつゆをはらはせて

きみがこゆれば關守もなし

梶原  
景高。  
一の谷  
今神戸市須磨區。

梶原  
景季。

詠みけりとかや

思へるは

武勇一偏  
武勇の方面にばかりかたよつたこと。

と詠みけりとかや。すべて學問して名高き勇士多し。文武は二つならず。詩歌を公家の玩物と思へるは、むげに口惜しき事なり。

(常山紀談)

自傳文

やまと心

やまと心を説いた人は少くない。やまと心を武士道の道德と同じやうに説く人もある。中には武勇一偏の敵愾心と思つてゐる人もある。余はこゝに余がやまと心の解釋を述べよう。

「やまとだましひ」といふ語は、古くは世才の意味に用ひられた。和魂漢才の和魂はそれで、漢才即ち學問の才と比べて、世才寧ろ常識の意味に用ひられた。後世では稍その意義が變つて、日本人特殊の心情といふ意味になつた。本居大人の

やまと心(自傳文)

明き淨き心  
晴れくとして邪  
氣のない氣持。  
惟神の道  
我が國固有の道義。

しきしまのやまと心を人とはゞ  
朝日ににほふやまざくらばな  
のやまと心は、世才とか常識とかいふ意味ではない。武勇一偏の  
意味でもない。

やまと心の一面は「明き淨き心」である。惟神かんながらの道で、祖先から會  
得して來た一筋の正しい誠である。汚れない、穢れない、曲らない  
心である。自己の良心に少しのやましいところのない明々朗々  
たる心である。この心から一切の正義に向つて進んで行く勇氣  
を生ずるものである。苟も正義の存するところ、死ももとより厭  
はぬのである。  
古來の忠孝の心も、武士道を一貫する精神もこれである。これ  
は道德的方面である。  
またの一面はみやびの心である。風流溫雅の心である。宇宙間

ものあはれを知  
る  
事物に就いてしみ  
じみとした感興を  
起すのをいふ。  
寛恕  
度量が廣くても  
ひやりのある心。

の美を理解する心である。いはゆるものあはれを知るといふ  
心である。寛恕、慈愛、憐愍等の思遣の心は、これから自然に生ずる  
のである。武勇一偏、まつしぐらに正義に向つて進む心の一面に、  
ものあはれを知る心があつて、始めてそれが緩和されるので  
ある。

景慕の情  
仰ぎしたふ心。  
おのづから切なの  
も云々  
自然にはげしく起  
るもの。

この風流心が詩歌に發し、音樂に發し、またこれ等を鑑賞する  
の趣味ともなるのである。これは美的方面である。  
「明き淨き心」と「みやび心」と、この二つの方面が備はつてこそほ  
んたうのやまと心と言はれるのであらうと思ふ。昔の武士が文  
武二道を心がけるのを理想としたのもこれが爲である。平忠度  
や、源義家の昔噺を聞いて、景慕の情のおのづから切なのもこれ  
が爲である。  
宮中の御歌所では、新年ごとに國民の詠歌を召される。國民が

發露  
外に發しあらはれ  
ること

百人一首  
鎌倉時代の歌人藤  
原定家が古今百  
人の歌人の歌一首  
づつを選んだのを  
後人が編輯したも  
のといふ

花は櫻木云々  
花は櫻が一番に美  
しく、同様武士は  
人の中でも最もす  
ぐれてゐるとの意

争うて奉る歌は十萬首、二十萬首にも上るといふ。皇室に對する忠義心、和歌に對する風流心、やまと心の發露はこゝにも認められる。

昔から今日までも廢らぬ百人一首の歌がるたの流行も、この心の發露である。

三月三日の雛祭は美しい風流な遊である。これには宮中に象どつて美しい人形が列べられる。皇室を尊敬する心が優美な人形遊に現れる。

これもやまと心の發露である。

さし上る朝日の光に美しい山櫻の咲き匂ふ姿、本居大人の「やまと心」の歌も、かく解すれば解し得られると思ふ。花は櫻木、人は武士。もこの意味に解したいと思ふ。

我等日本人は太古より承継ぎ、歴史によつて養はれたこのや

まと心を失つてはならぬ。世界に類のない皇室と國民の美しい關係が、このやまと心を發生せしめたのである。

### 一三 日章旗と水戸烈公

木宮泰彦

凡そ國旗は國家の標號であるから、その國の歴史を語り、その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示すものでなくてはならぬ。世界いづれの國と雖も國旗の制のない國はないが、我が日章旗のやうに鮮明で純一、端正で雄大なものはない。

しかし、我が日章旗が國旗として制定されるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるの

木宮泰彦  
歴史家。静岡高等  
學校教授。明治二  
十年静岡縣に生れ

水戸烈公  
德川齊昭。水戸の藩主。萬延元年(一八六〇年)歿、年六十一。  
嘉永六年(一八三三年)第百二十一代孝明天皇の御代。二五

蒸氣船さへ

意見を奉らしめた  
旭日を以て總船印となすべし

は、水戸烈公の功績である。

嘉永六年六月、米艦四隻が浦賀に來て交通を求めた時、我が國の上下驚愕して爲すところを知らず、幕府は水戸の烈公を起して事にあづからしめた。その年の九月、幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船建造の禁を解いた。一たび大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造され、中には蒸氣船さへ造るものがあつた。随つて我が國に於ても、外國船と紛れないやうに、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗とは言はず、總船印と稱してゐた。そこで幕府は有司に命を下し、意見を奉らしめたところ、評定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大

目附、目附等は中黒を用ふべしと主張し、衆議紛々として、何等決するところがなく終つた。



徳川齊昭

翌安政元年五月、再び國旗制定の論が起つて、大目附、目附等は總船印には中黒を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黒は新田の中黒など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを我が日本國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顛倒したもので、その當を得ぬ。苟も國意を代表して威を萬國に輝かす國旗

輝かす

としては、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黒を以て印とすべしと論じて、その旨を幕府に建議された。けれども大目附、目附等は前議を固執して動かない。そこで烈公は七月一日再び建議案を奉り、中黒を以て國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ、衆議を排して、七月十一日次の如き發令があつた。

大船製造に就きては、異國船に紛れぬやう、日本總船印は白地日の丸幟相用ひ候やう、仰せ出され候。且また公儀御船の儀は、白紺布交の吹貫、帆中柱に相建て、帆の儀は白地中黒に仰せ出され候條、諸家に於ても白地は相用ひず、遠

勝手次第相用ひ申すべく候

書出し置き候やう致さるべく候

相伺はせらるべく候

新見正興。豊前守と稱した。安政六年(一八二九)外國奉行となり、翌年正月米國に使した。この時新見村、淡路守、米栗、後守、は、小栗、後守、は、國軍艦に乗り、勝安房、丸に搭した。

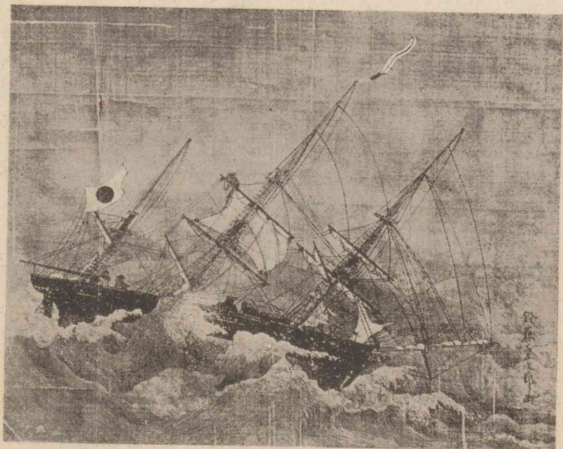
方にても見わかり候帆印、銘々勝手次第相用ひ申すべく候。尤も帆印は、その家の船にても、豫て書出し置き候やう致さるべく候。右大船の儀、平常廻米の外、運送に相用ひ候儀、勝手次第に候へども、出來致し候上は、乗組人數、並びに海路乗筋、運送方等、なほ取調べ相伺はせらるべく候。右之通相觸れらるべく候。

かくの如く烈公の努力によつて、我が旗印は光榮ある日章旗と定まつたのである。後數年を経て安政七年、外國奉行新見正興等がアメリカ合衆國に使し、條約の批准交換を行つた。この時始めて堂々日章旗を翻して、かの國へ行つたのであるが、かの國人はその壯烈な意匠を見て、驚歎したとい



ふ。

國旗はかくの如くにして定まつたが、その紋章のよつて  
 來つたところは甚だ遼遠である。畏くも皇祖の御名は、天照大  
 神、または大日靈貴と申し奉り、  
 大神一たび天の岩戸に隠れさ  
 せ給へば、天地爲に晦冥になつ  
 たといふのは、天日とその徳を  
 等しくし給へる事を物語るの  
 である。随つて天皇の御位を天  
 つ日嗣と申し、皇太子を日嗣の御子、日並皇子など申し奉つ



丸 臨 威

隠れさせ給へば

等しく給へる事

小野妹子  
 第三十三代推古天  
 皇に仕へ、同十五  
 年に隋に使した。  
 遣し給ふや  
 げにや

日章をおいて他に  
何があらう

田邊尙雄  
 音楽理論家。國學  
 院大學教授。明治  
 十年大阪市に生れ  
 た。  
 ……事は……わか  
 る

てゐる。聖徳太子が小野妹子を隋に遣し給ふや、その國書に  
 いはく、「日出づる所の天子、書を日没する所の天子に致す」と。  
 またいはく、「東天皇敬みて西皇帝に白す」と。げにや我が國は  
 アジヤの東方に位し、日出づる所の國である。旭日の輝々た  
 る光は熱烈活動のさまを示し、その眞紅の色は皓潔至誠の  
 情を示してゐる。我が日本の標號とするに日章をおいて他  
 に何があらう。

(ちもしろい日本歴史の話)

### 一四 國歌の話

田邊尙雄

一國の音楽がどれ程その國の人情に左右されるかとい  
 ふ事は、國歌などを見ると最もよくわかる。實に國歌の比較

ドイツ(獨逸)

は、一面には國々の國體を比較する事にもなり、またその國民の氣風性質などを知る便りともなる。今試に西洋の三大音樂國と言はれてゐるイタリア、フランス、ドイツ三國に就いて、その國歌を較べてみよう。

最初まづフランスの國歌「マルセーエイズ曲」に就いて考へてみるとこれには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向をおびてゐる。随つて國歌の上には尊嚴といふものがない。その代り感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふ事が、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊にそれが著しい。この意味でマルセーエイズ曲は、眞にフランス

これには……表れてゐる

この國歌には……著しい

人民を代表する國歌としてふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性が明らかで、徒に感情に走らない。随つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのが、また我が國や、イギリスなどとは甚だ違つてゐる。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふ事は即ち皇室を尊重する事である。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して勝利を得る事を喜ぶといふやうな思想から起つた愛國心である。随つて國歌には、我が國のやうに皇室尊崇などといふよりは、他

愛國心といふのが……違つてゐる

ラインの守  
 「聲は雷の如く、劍の響と波の音とにまじりて聞ゆ。ラインよ、ラインよ、ドイツの國のラインよ」と。この河の防禦者は誰ぞ。安んぜよ愛する祖國。ライン河の守は且忠實に。堅固に且忠實に。」

ドイツ人の祖國やいづこ  
 「ドイツ人の祖國やいづこ。プロシヤか。はたスワビヤか。ぶだうの實のラインの岸か。かもめの泳ぐバルチックの濱か。否、否、我が國は更に大なるべし。」

國に對する示威を旨としてゐるやうな趣が認められる。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國やいづこ」を見るとよくわかる。かやうにドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが示威的であるのに反して、フランスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、かの歐洲大戦争の光景が目に見えるやうに感じられる。

翻つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌と言へば、「ロイヤル・マーチ・オブ・イタリー」と稱せられる軍歌風

イタリーの統一  
 西紀一八六一年。  
 イタリーが…王國となつたのは

どうも…憾がある

の行進曲であつて、歌ではない。これはなかく、面白く、愉快に出来てはゐるが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歴史によるものである。イタリーが現今のやうに統一されて王國となつたのは、今からわづか七十年程前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、隨つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤル・マーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且またイタリーでは從來音樂が頗る發達して、

進んでゐたものだから

作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては、餘りに曲を飾り過ぎてしまつたのである。



林 廣 守

林廣守  
宮内省雅樂部副  
長。明治二十九年  
(一八九六年)歿、  
年六十六。

國旗なる旭日の意匠と……旋律と

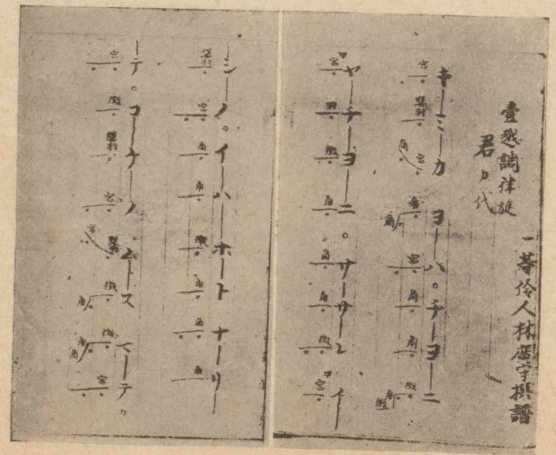
に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の

さて日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮内省雅樂部の林廣守の作曲で、割合に新しいものであるに拘らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常

しかもその老輩

威嚴を示す表徴となつてゐると言つてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を著けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則つて作つたのが現今の「君が代」である。我が國の國歌がかかる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手になつたといふのは、ちよつと異様であるが實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞に大和民族の眞情を流露し



君が代 譜

た音楽である。かの神武天皇御作の久米歌によつて作られた久米舞などは、いかにも雄大且壯嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は皆その結構の偉いのに驚歎するといふ事である。かやうに大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音楽が、いはゆる雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも形式に於てかなりりつばなものであるといふのは、當然な事である。

一五 大日本國

御祖みおやの神のうませし國に、  
皇孫すめみま降りて君とし知らず。  
實祚じやくそくは天地と窮りあらず、  
この國このくに、この君このみこと、世にたぐひなし。

大君、民を子のごとおぼし、  
國民、君をば親とし慕ふ。  
さながら一家の睦むつはとはに。  
この國このくに、この君このみこと、世にたぐひなし。  
大和の國のしづめの山と、  
富士の嶺たかねみ空に神さび立てり。  
貴き御國みくにの姿を見せて、

伊弉册

伊弉册

伊弉册

高きはこの山、世にたぐひなし。

物事によつて  
ハに見えたりし事と形に現はす

日出づる國のしるしの花と、

櫻は霞にまがひて咲けり。

氣高く雄々しき國ぶり見せて、

匂ふはこの花、世にたぐひなし。

山田新一郎  
元北野神社宮司。  
元治元年(二五二  
四年)福岡に生れ  
た。

北野天満宮  
官幣中社。京都市  
上京區馬喰町。

一六 菅公の夫人

山田新一郎

菅公の夫人は京都の北野天満宮の西の御座に祀られて  
ゐる。夫人は菅公に別れて數年の後には、住むべき家もなく  
なり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓してをられ

昌泰二年  
第六十代醍醐天皇  
の御代。一五五九

歸せられまい

延喜元年  
第六十代醍醐天皇  
の御代。一五六一

たので、普通吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年夫人が五十  
歳に達した時、醍醐天皇がわざ／＼祝賀の敕使をお遣しに  
なつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳  
記は多く傳はらないが、當時有數な賢夫人であつた事は考  
へられる。菅公の御子方はなか／＼大勢であつたが、上の方  
の御子方は、四人までも菅公と同時に諸國に流された程、そ  
ろつて相當な位置に出身されたところから見れば、その訓  
育の功は、公一人だけには歸せられまい。夫人の内助もあづ  
かつて力のあつた事と思はれる。

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷され  
て、二月一日都を立つて行かれる時、

東風吹かば云々  
拾遺集卷十六雜春  
の部。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春をわするな

と詠まれたのは、梅花に寄せて最愛の夫人に別れを惜しまれたものとも言はれよう。西遷の途すがら、都への便りにことづけて、

君が住む宿の木ずゑを行くくくと

かくるくまでにかへり見しはや

と盡きぬ名残を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してであつた。以てその琴瑟ギンゼの情もしのばれるのである。

夫人が京都の留守邸に於ける獨居の様子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少うかゞはれる。

君が住む云々  
拾遺集卷六。

以て  
しのばれる

公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲惨極る二箇年の月日を送られたに較べて、京都の方もまた劣らぬ境遇であつた事が想像される。

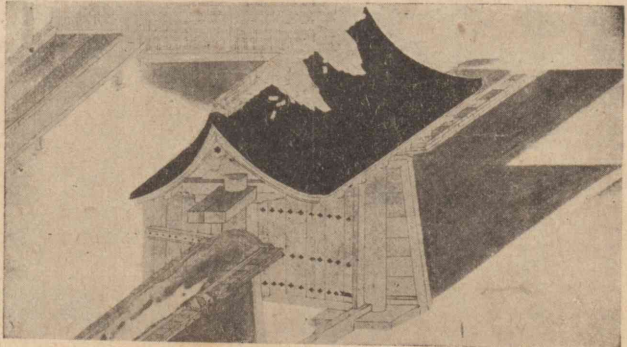
菅公の太宰府で詠まれた詩のうちに「雪夜家竹を思ふ」と題して「家僕は早く逃散しぬ。寒を凌ぎて誰か掃撤せん」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪押竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷の事を氣遣つてをられる。

この詩は延喜元年即ち「去年今夜」の詩を詠まれた年の冬の作である。

一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮

菅家の事であれば

して育つた御子たちは大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつた事は、言ふまでもあるまい。こんな困難な家、しかもお咎を蒙つた菅家の事であれば、はしたない下男どもも早々に逃出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかかる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて公の歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてをられた事は、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として表れてゐる。



菅家の門 (松崎天神縁起)



配所の菅公 北野天神繪卷



これも延喜元年冬の作と思はれるが、「家書を読む」と題していはく、

「消息寂寥たり三月餘。

便風吹著く一封の書」

三月餘りも都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日はいかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た、嬉しい事である。

「西門の樹は人に移し去られ」

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅かりつばな樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて

行つた。多分米鹽の代に賣つたか、取られたかしたたのであらう。

「北地の園は客を寄居せしむ。」

天神御所の北地と言へば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、こちらの方は借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣食に下宿業。これが昨日まで右大臣として天皇の寵遇一方でなかつた菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を讀まれたであらうか。

「紙に生薑をつゝんで藥種と稱し。」

昔の草根木皮の藥には、生薑しやうがの配煎が必要とされたのであるから、いはゞ生薑は家庭衛生の必要品である。たまた生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。困難のうちにも一物も苟もせられぬ夫人の用意の程が知られる。

「竹に昆布を籠めて齋儲さいぞと記す。」

内のお祭のお供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされず、直ちに竹筒に入れて、お祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は、千言萬句よりも明らかに、京地に殘された菅公一家の生活状態を菅公の筆で表してゐる。何たる悲惨

天神御所  
公の屋敷址を後世  
天神御所と言ふ。

もらふ(貰)

何たる

注意してをられる  
齊家の有様

な境遇であらうか。その半面には、夫人が凜乎たる決心を以て百難を排して生計の方法を講じ、缺乏のうち祭事を大事にし、薬餌の果までも注意してをられるまことに行届いた齊家の有様が、ありくと見えるではないか。

「妻子飢寒の苦しみを言はず。

これ還つて余を懊惱せしむるを愁ふるが爲なり。」

留守宅の現状は前の如くであるが、それをたゞその通りの事實として報じただけで、その餘は徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言も言うては來ぬ。言はないどころか、お留守はとにかくどうにかやつてゐますと、卻つて安心を求めて來る雄々

しさは、なか／＼並々の婦人で出来る事ではない。榮華これ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない人と言へようと思ふ。

一七 昔の婦人と今の婦人 下田次郎

今の若い婦人を昔の婦人に比べると、長所もあれば短所もある。まづ身體に就いて言へば、今の若い婦人は、學校に於て體操や競技を行ひ、遠足、登山、旅行などをするから、一般に昔の婦人よりは身體が發育して、筋肉が緊り、動作が敏活で、姿勢が正しく、歩行もりつばである。しかし多少男性的にな

下田次郎  
教育者。文學博士。  
東京女子高等師範  
學校名譽教授。明  
治五年廣島縣に生  
れた。

る傾はあつて昔の婦人のよわくとした所は減つたやう



現代の女學生

るやうになつてからは、女子の身長が伸びるやうになつた

である。また背丈が伸びたから、若い娘が母親と歩いてゐるのを見ても、大概は娘の方が高い。人種の身長が體育によつて伸びるかどうかは議論のある所であるが、日本人はこれまで居坐をはじめ生活が窮屈であつたから、人種の身長（身長）の自然の發達に到らなかつたので、脛腰を伸して自由に生活す

理科の如きは、昔の婦人には殆どなく

のかも知れない。そしてそれは人種の身長（身長）の標準が變つたといふのでなく、自然に返りつつあるものと言つてよからう、次に精神の方面に就いて見ると、今の若い婦人は、學校で系統的（系統的）教育を受けてゐるから、知識が多方面に互つてゐる。特に理科の知識の如きは、昔の婦人には殆どなく、たゞ經驗でやつてゐたのである。今の若い婦人は一通りの理科の知識はもつてゐて、これを家事に應用す



現代の女學生

る事が出来る。しかし昔の婦人には経験を積んで、実際には  
 なか／＼上手な事もある。器具の保存だとか、料理の仕方だ  
 とか、理窟はなしに経験から上手にやつて、卻つて今の理窟  
 だけ知つた者よりは、實際の成績を擧げる事もある。今の若  
 い婦人には歴史や地理の知識もあり、日本が歴史的に地理  
 的にどういふものであるかを知つてゐる。また世界に就い  
 ても多少知つてゐるから、國家に對する女子の責任といふ  
 事も、多少は皆感じてゐる。昔の婦人は眼界が狭いから、家庭  
 以外に自己の影響を考へる事は餘りなかつた。今の若い婦  
 人は、數學なども一通り心得てゐるし、組織科學も修めてゐるか  
 ら、身先を考へる能力理性が昔の婦人よりは發達して、何事も獨斷的でなく、そ

の理窟を考へるやうになつた。昔の婦人は経験のみです  
 から、一度行詰まると、どうしてよいかわからなくなる。

また昔  
 あつた  
 他主的  
 婦

また昔の婦人は、主に命令によつて動いてゐたので自主  
 的でなく、命令他主的であつた。たゞ命ぜられたまゝにしてゐた  
 傾向があつたが、今の若い婦人は、服従する前にまづそれが  
 正しいか正しくないかといふ事を考へる。即ち批判的にな  
 つて來たのである。服従と言つても、善悪を考へずにはいられない盲従でなく、理解のある  
 服従をしようと思ふ。昔の婦人は家庭本位で、家人の爲には  
 自己を獻げる事を厭はず、いかなる困難にもよく堪へたが、  
 今の婦人は昔の婦人よりは利己的で、奉仕の念や忍耐力が  
 少くなつたやうである。昔の婦人は舅姑に事へ、夫に事へる

ことを第一の務としてゐたが、今日は夫婦本位になりかけて、舅姑に事へることが、昔よりはゆるがせにされるやうである。

わがまゝ(我儘)  
う……と  
ないふ  
決心  
や

昔の婦人は奉仕の念が強く、よく耐へ忍ぶ事をしたが、今の婦人はどちらかと言へばわがまゝでこらへ性がないやうである。少しの困苦も聲を大きくして訴へ、氣に入らねば離婚するまでとして、昔のやうに死んでも實家へは歸らぬといふやうな決心は、大分弱くなつたやうである。

今の若い婦人は生活の安固を慮つて、職業的能力を養ふ事を力めるやうになつた。結婚しないで獨身であつても、食ふに差支へないやうに將來を慮つて、自活能力を養つておく

事を心掛けてゐる。昔の婦人は夫に一身を託したきりで不慮の不幸に就いての準備といふやうな事には、餘り注意しなかつた。随つて夫によりすがるだけで、自己の意志を行ふ事が出来ず、盲從的で意氣地のない者となる傾向があつた。それで随分悲劇的生涯を送つた者も少くなかつた。

昔の婦人はたゞ家庭に育つて世間を見ないから、心が狭く、世間馴れない。随つて家庭に於ても、嫁との不和衝突などがありがちであつた。今日の若い婦人は學校に行く。學校は皆同じ要求権利をもつた、同じ年輩の者の多數の集りであつて、つまり一つの社會である。此所では、わがまゝをする事が出来ない。他の権利を認め、自己の義務を行はねばならぬ。

随つて人間が社會化され、世間馴れて來る。心も大きくなり、同情も思遣も生ずる。それで學校教育を受けた女同士が、嫁となり姑となつた暁には、昔の嫁姑ほど互に窮窟に感じないで融通がついて、一層家庭が圓滿に行くと思ふ。學校が學藝を授ける事は結構であるが、それ以上、その生徒を社會化する事は學校特有の作用で、看過すべからざる學校教育の利益であり、殊に女學校のありがたみは此所にあるのである。

西洋の婦人は働いてゐる

一體西洋の婦人は、日本の婦人から見れば教育も高く、能力もあつて、家庭のみならず國家社會に對しても大きな働をしてゐる。先年歐洲大戰に於ける女子の活動ぶりは實に

目覺しいもので、あれまでに働けるとは考へられてゐなかつたのである。随つて戦後の婦人の活動も一層著しくなり、職業の範圍も擴がつて來たのである。今日の我が國の若い婦人は、昔の婦人に較べると、よほど積極的、活動的になつて來たが、これを西洋の婦人と比較すれば、まだよほど消極的、退嬰的の所がある。それで今の若い婦人は、その從來の我が國婦人の長所を捨てないと同時に、西洋婦人の長所も採入れて、一層能力ある者となり、積極的に働くやうにしなればならぬ。

終りに、昔の婦人と今の婦人との最も著しい差異は、昔の婦人は自己の價値といふものを十分に意識してゐなかつ

婦人の自覺  
といふ事がある  
と所で

だが今日の婦人は自己に目覺めて、自己の使命を一層高く見、自己の眞價を發揮せんと努める事である。婦人の自覺といふ事が恐らく今日の婦人の、昔の婦人に比して、最も進んだ所であると思ふのである。

(婦人と希望)

一八 女神の像

下村虎六郎

イタリーの大彫刻家ミケランジェロが、或日、一人の友人と野を散策してゐた時、ふと路傍の叢の中に一個の自然石を見附け出した。彼は立止つて暫くじつと見入つてゐたが、友人を顧みて、

「この石の中に、天の女神が擒にされてゐる。私はこれを救

下村虎六郎  
教育家。大日本聯合青年團講習所長。明治十七年佐賀縣に生れた。  
ミケランジェロ  
(西紀一四七五—一五六四年)

あつらへる(詠)

ひ出さねばならない。

意味を強めろ

と叫んだ。その自然石は、表面こそ黒つぽく苔むしてゐたが、彫刻にはあつらへ向きのきめ地は平地の細かい、見事な大理石であつた。彼はさつそく人夫を雇つて、それを自分のアトリエに運びこませ、その日から丹念に鑿を振ひ始めた。

幾月かの後、彼のアトリエの中には、見るからに氣高い、眞白な大理石の女神の像が、窓から射しこむ柔かな光線を浴びて立つてゐた。

南窓

一人の彫刻家が恰好な大理石を見附けて、それを一つの女神の像に刻み上げたといふ事實は、別に驚く程の出来事ではない。彫刻家なら誰しもよい石を見附けて、それによい



像を彫らうとするに相違ないのだから。だが我々は、この話に現れた表面の事實だけを見ないで、ミケランジェロが發した言葉の中から、大藝術家の深い心をしみて、と味はつてみるべきである。

「この中に天の女神が擒にされてゐる。」と見る心、この心こそは藝術家にとつて至上の寶である。そして、それは獨り藝術家にとつて大切であるばかりでなく、宗教家にも、教育家にも、農人にも、工人にも、またいかなる種類の仕事をする人にもなくてはならない尊い魂なのである。

眞の宗教家は罪人の胸深く神の姿を見出さうとする。眞の教育家は悪戯者のわめき聲にも佛性のさゝやきを聴か

それは：尊い魂  
なのである

人生は：恵まれ  
て來たのである

うとする。一塊の土に自然の深い心を讀まうとするのは眞の農人の心であり、油じみた機械をなでつゝ、其所に永遠の生命を感じようとするのは眞の工人の心である。そして、人生はかうした尊い魂によつてこそ、その有用にして高貴なものすべてを恵まれて來たのである。

宇宙は無限の創造にいそしんでゐるといふ事は、言換へると、善きものを絶えず暗から光へ送り出してゐるといふ事である。宇宙の悦と力とは、其所から生れて來る。人生もまたその流れに沿うて歩み、其所から悦と力とを汲みとらなければならぬ。

だが、善きものを見出す事と、その善きものを暗から光へ

力が働かない限り  
：幻に過ぎない  
であらう

救ひ出す事とは、決して同じ事ではない。見出したから必ず救へるとは限らない。無論、見出す事は大切である。しかし、見出したものを救ひ出す力が働かない限り、その見出したものは一つの幻に過ぎないであらう。

よき稲やよき果實  
が

この事は極めて明瞭である。ある土壌を見て、その中によき稲や、よき果實がひそむ事を発見し得ても、耕し、植ゑる事がなければ、何所にも稲や果實の實體はない。あるものはただ頭の中の美しい幻だけである。救ひ出すには救ひ出すだけの骨折を必要とし、ものによつては死の苦難をすら伴なふ事がある。

人生に就いて少し深く考へる人なら、人生には善きもの

を発見して、それを暗から光へ運び出す事以外に仕事がなく、苦難にうち克ちつゝ、その仕事を果す事以外に眞の悦はないといふ事に氣附くであらう。

一見……つまらな  
い

我々は一見どんなにつまらないものでも、それを見捨ててはならない。それを視詰める事によつて、その中から大自らの心をよみ、神の姿を見出すべきである。其所に人生の悦が最初の芽を吹出す。だが同時に、その見出された神の姿は我々の力を加へざる限り、永遠に牢獄の中にある事をも悟るべきである。この悟があつて、生命は初めてその力強き躍動を始める。かくてくはを振上げ、槌をうちおろし、五體と頭腦との全部を搖動かして猛然と立上る時、我々は既に完全

力を加へざる限り  
：牢獄の中にあ  
る

立上る時……握り  
しめた

に人生を握りしめた事になるのである。力と悦とはかくて  
滾々として盡きる事がないであらう。

こゝまで述べて来て、私は一つの大切な事を言ひ忘れた  
やうな氣がする。それはあらゆるものから善きものを見出  
す爲には、必ず自分自らの中にも善きものがひそんでゐな  
ければならないといふ事である。否、ひそんでゐるだけでは  
いけない。その善きものがまづ見事に掘起されてゐなければ  
ばならない。自分自らの善きものを掘起すといふ事は、實は  
一切の始であり、そして終である。それは恐らく人生の全部  
であらう。と言ふのは、それがありさへすれば、すべての善き  
ものはおのづからにして生れて來るであらうから。

それは……といふ  
事である

と言ふのは……か  
ら

女神たらしめん

ミケランジェロはまづ自分自らの胸の中に女神の像を掘  
起してゐた。そして黒く苔むした石の中に女神の姿を見出  
し、それを見事に救ひ出す事が出來た。人生を天の女神たら  
しめんとする者は、まづ何よりも自らの心を天の女神たら  
しめなければならぬ。

### 一九 日本的譬喩

譬喩とか、諺とか、なぞとかいふものは、皆その國民の一種  
の詩的産物で、おのづからその國民の氣質や風俗を表し、そ  
の國民には最も明白に理解されるものである。我が國は早  
くから支那の文學を入れて、文章も近年までは漢文でなけ

造句成語を使ひ、そのまゝ使ふ。

支那的成語、日本的成語

いつたも

いつたところが

れば文章と思はなかつたくらゐであるから、随つてその文章中にも支那人の造句成語を使ひ、支那人の用ひる譬喩をそのまゝ使ふ事が非常に多かつた例へば、鶏を割くに牛刀を用ひる。といふ。支那人のやうに牛を屠つたり、鶏を潰したりする國民にはすぐわかるだらうが、出典を知らぬ日本人には、ちよつと耳に入つただけでは理解出来ぬ。纍々として喪家の狗の如し。といつたところが、支那では葬式のあつた家では犬に肉を與へぬといふ謂れを聞かなければ、成程と合點がゆかぬ。鼓を鳴らして責める。といつても、知らぬ人は能樂でも始めるのだらうと思ふかも知れぬ。糟糠の妻は堂より下さず。は、細君をお堂の中に入れて、しまつて置くのか

時と場合は…

と合點するかも知れない。そんな例は幾ら言つても果てしがない。こんなちよつと聞いてわからぬやうな譬喩や諺を幾ら引用しても、つまりはこけおどしに過ぎないので、それを讀む人、聞く人は偉い人と思ふかも知れぬが、感服はしないに相違ない。それよりも純粹に日本人の作つた、日本の風俗人情に合ふやうなのを用ひる方が効果が多い。尤も時と場合は考へなければならぬが。

日本の通俗の譬喩や諺の中には、随分と巧妙なのがある。尤も中にはむづかしいのや、出典のあるものもあるが、わかり易いものもなかく多い。青菜に鹽、榮螺に金米糖、誰が聞いてもそのものが目の前に浮ぶ。虎を市に放つが如し。といふ

誰しも

借りて

のはまづ大抵は想像出來るとしても、暗がりから牛を引出す。といふやうな適切に誰にでもわかるのとは比較にならぬ。騎虎の勢と言ふよりも、乗りかゝつた船の方が廣くわかる。狎がくしやみをしたやうとか、閻魔が溢柿を食つたやうとか、更に進んでは、かち栗がくしやみしたやうとかいふ類の譬喩を聞いては、誰しも笑はずにはをられぬ。沈魚落雁閉月羞花といふ美人の形容よりも、卵に目鼻の方がどのくらゐ簡單でいゝかわからぬ。狼に衣を著せたやうとか、柿の葉の木偶とかいふのは、いかにもその風姿がはつきりする。灰吹へ載せた龜の子、文庫を背負つた家鴨の歩き方など、卑俗のものを借りて、極めて明瞭な印象を與へる。二階から目薬

文章家や演説家が  
使はぬ

「二階から尻あぶり」など迂の極、さては「狂人の股ぐらへ蜂がはいつたやう」雪隠で槍を使ふやうの如きは、その機智測り知るべからず、皆日本人の頓智を示したものである。雑魚のとまじり、どん栗の背くらべ、上手な漢文家も思ひ至らぬうまい譬である。かういふ類は非常に澤山あつて、我等の祖先の國民の作つたものが澤山傳はつてゐる。目に一丁字のない人でも随分かういふ譬喩を使ふ。然るに文章家や演説家が卻つてかういふ日本純粹のものを棄てて使はぬのがをかしい。

すべて譬喩は新奇を貴ぶ。面白い譬喩でも何遍も聞けば珍しくなくなる。随つて感興をひく事が少い。何時でも同じ

用ひるにしても

ものが出ると、わかつてゐる人にはたゞその意味だけが傳はつて譬喩としての一種の効果は生じない。それではせつかく譬喩を用ひたかひがない。それ故、日本固有の譬喩を用ひるにしても、そればかり何遍も繰返しては役に立たぬ。つまりは自分で新しい譬喩を作つて行く創造の力がなければならぬ。文章家や演説家が獨創の力によつて作り出した巧妙な譬喩は、人を感動せしめる力が最も強いものである。

自修文

言葉の變遷

佐々醒雪

不思議なものは、言葉の變遷である。日本語は幸にして二千年近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しか

佐々醒雪  
國文學者、俳人。  
文學博士。名は政一。  
京都市の人。政一  
大正六年歿、年四十六。

竹取物語  
作者不詳。  
伊勢物語  
二卷。作者は詳かでない。

も萬世一系の皇室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約千年前に出來たと言はれる竹取物語や伊勢物語を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國は言ふまでもなく世界中にまたとはないのである。一千年前即ち十世紀前と言へば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は頗る變化したものが多し。

例へば、甚だしく變遷したものは「いへ」といふ語であらう。昔は「いへ」と言ふと、家族とか家庭とかいふ事で、随つて「いへあるじ」と言へば、一家族中の主長で、即ち戸主の事であつた。然るに今日「家」と言ふと、家屋即ち建築物の事で、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平

薄倖者  
ふしあはせな人。  
雲泥の違  
天と地と程も離れ  
た大きな相違。  
寵愛  
かはいがること。

安時代の人が「あはれなる人」と言ふと、大抵は美人の事である。我が貧民や薄倖者を「あはれなる人」と言ふのとは雲泥の違ではないか。かなし」といふ語も今日では悲哀の義にのみ使ふが、古へは極めて寵愛してゐる妻や子の事を、かなしき妹」とか、かなしくする兒」とか言つた。

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同様な變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふ事であるから、紙屑買が「御不用物はございませんか」と呼んで来る。然るに中古では「不用なる者」と言ふと、用ひるに堪へぬとんまかあはうの事で、更に降つて武家時代に入ると、爲朝が不用であつたから、父爲義が九州へ追つた」などと記してあつて、不用といふのは、いたづら者、または無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものはございません

か」と呼歩いたら、「いたづら者はないかね」と呼歩く鼠取薬と間違へられたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生ずる事もある。漢方醫が廢れて薬を煎じる事がなくなつても、薬罐といふ名は残つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば際限もないが、就中希代なのは「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだりつばな陶磁器の出來ぬ頃、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗と言つたのである。然るに日本で硬い上等の物が澤山出來るやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも陶磁器を用ひ始めた。そこで飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日では珈琲茶碗とさへ言つてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、

矛盾

つじつまの合はな

漢方醫

支那風の醫術を行

希代

不思議なこと。

抹茶

茶をひいて粉末と  
したものを湯を注  
いでかきまぜて飲  
む。茶の湯に用ひ  
る。

飯を食ふのや珈琲を飲むのは、飯碗、珈琲碗とでも言ひさうなものだが、さう理窟通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは、本來酒を飲む時に食ふ物といふ語である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物にする者の事で、古へは野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻も、皆「磯菜」と言つた。それから魚類は、「な」の中の上等の物であるから、上等な建築用材を「ま木」と言ひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」と言ふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに酒といふものは、上戸即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求める事が普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふ事に定まつてしまふと、下戸が食べても、やはり

これを「酒な」と言ふのは、飯を食べてもやはり茶碗と言ふのと同じ不思議である。

言葉はまた使つてゐるうちに、だん／＼下落するものである。例へば、「大工」といふ語は工即ち工藝家中の俊秀な者の尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛の叩き大工でも、やはり大工である。かの棟梁、親方なども同様で、今日は、一人の手下もない、子分のない男でも、印絆纏さへ著てゐれば、即ち親方であり、棟梁である。

最後に一つ故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意に作つた人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉と言つて、丸木橋を獨木橋と言つたり、一軒家を獨立家屋と言つたりした事もあつたが、今ではそれも廢止されたやうだ。その他には迷信から來た變造語もいろ

統領  
をさ。かしら。

棟梁  
大工のかしら。



齋宮の御所  
齋宮のをられる御  
所。齋宮は昔天皇  
の御即位ごとにト  
定して伊勢神宮に  
奉仕せしめられた  
未婚の内親王、ま  
たは女王。

窮極  
最終の所。はて。

河東碧梧桐  
俳人。名は秉五郎。  
松山市の人。昭和  
十二年歿、年六十  
五。  
正岡  
正岡子規。

いろある。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を「悪し」と聞える  
といつて、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるので「よ」と  
いつたり、梨を「ありの實」硯箱を「あたり箱」鯛を「あたりめ」といふ類  
が行はれてゐる。古へも伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御  
所では、髪のない僧侶を「わざと」髪長などと言つた例もある。  
要するに、言語界の不思議な現象は、同一の語例へば髪長とい  
つて髪のない事を表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられる  
のであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずと言ふのが  
至當であらう。  
(醒雪遺稿)

二〇 カナリヤ日記

河東碧梧桐

三月二十日 今日のかねての約束の通り、朝のうち正岡

お律さん  
子規の妹。

…される  
をばさん  
子規の母。  
なんぼ

えごま(荳胡麻)  
ひえ(稗)

へカナリヤをもらひに行く。愈、お引取りします」と言ふと、お  
律さんが「餘り汚ないから」と籠の中の水鉢を洗つて水を替  
へたり、餌の中の殻をふうふう吹いて、別に餌を入れてやつ  
たりされる。をばさんも庭へおりて、芽生の小松菜を採つて、  
それを籠に入れてやられる。なんぼ芽生でも、泥の附いた根  
のまゝでいゝのか知らんなどと内々心配してゐると、カナ  
リヤはすぐそれを咬へて、根から莖から葉まで、うまさうに  
食つてしまつた。さう言へば、餌はえごまとひえとを三七に  
まぜ、これに砂をまぜてやれば糞詰りがしないといゝとい  
ふ事は、この間教へてもらつたのであつた。それから羽の色  
の黄色の強い方が雌で、少し禿げたやうに白みがかつてゐ

傷めたりする

るのが雄であること、この雌は實にこの雄の子であること、この雄は外に澤山ある中でも一番よく鳴くこと、かういふ風に二羽だけ入れて置くと卵を産むが、もうその産む時分であること、卵を産みかけたら、餌を四六くらゐにえごまを殖してやること、その時は止木も餘り汚れてゐると足を傷めたりするから、それを取換へてやらねばならぬこと、籠の底も餌のこぼれや糞の溜りですぐ汚れるから、これも注意して掃除せねばならぬこと、卵は日に一つづつ多くは五つくらゐ産むが、産んだら取つて置いて、終りに一緒に入れてやる方が孵化<sup>か</sup>さすに都合がいゝといふこと、しかし、この雌は今年が始めての産だから、五つも産んだところで皆まで

孵化<sup>か</sup>さす

よう……すまい

いろ／＼な話

よう孵化<sup>か</sup>すまいとのこと、どうかすると雄が啄いて食つたりすること、いろ／＼な話が四人の間に言ひはやされて、一向座を立つ機會<sup>か</sup>がない。始めて鳥を飼はうとする自分には、聞く事ごと皆珍しくて面白いのだ。

「卵を産んで雛になるまでがお楽しみ」とお律さんが頻りに言はれる。成程それも楽しみだ、何分我が輩の頭にさはるくらゐ鳴く。實によく鳴くからなあ」と昇<sup>あ</sup>さんが言はれる。これも嬉しい。

まづカナリヤの飼養法は一通り耳に入れたつもりで、やうやう座を立つて、籠を兩手にかゝへながら歸つて來た。籠は前金網、三方板の通例のである。ひえもえごまも砂もまだ

昇<sup>あ</sup>さん  
子規の通稱。

澤山入つてゐるので、何の事はない、持參金附きの養女をしたやうなものだ。晩に姉が歸つて来て言ふには、私もこの頃に來る、カナリヤも出來る、今まで二人きりであつたのが、急に賑やかになつたなあ」と。

三月二十一日 何時になく目が早くさめたので、手づから水もかへ、餌も入れてやつた。ひえ殻を吹く時に、鼻の穴へ殻の飛びこむので閉口したが、餘り強く吹いたので、大分正味のひえもこぼれたらしい。縁側に坐りこんでじつと籠の中を見てみると、餌壺に捉まつて、餌を拾ひながら、一口々々あたりをうかぶ様子がいかにも仰山らしい。ぱちくと殻を割る音が際立つて聞える。それから三本ある止木をを

をさ(校)

磨いては  
とまつては

さの往來するやうにおりたり、上つたり、横にはつたり、地面を歩いたり、噛合つたり、蟲を取つたり、水を飲んだり、ちよつともじつとしてほゐない。それは忙しいものであるが、その間には嘴を磨いては金網にとまり、金網にとまつては網を噛んだりして、牢破りでもしさうだからをかしい。

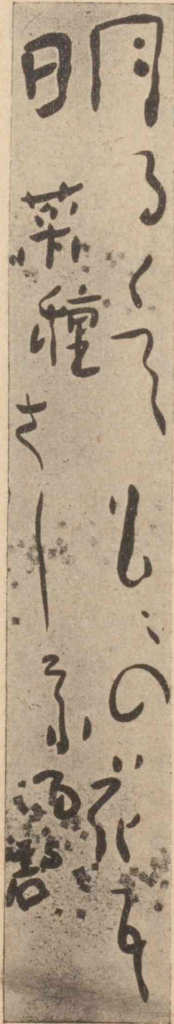
日暮に社から歸つて見ると、何の事だ、カナリヤの籠が座敷の正面床の間に飾つてある。この近所にあるとは今まで氣も附かなかつた大きなく、黒猫がカナリヤを取りに來たので、それで内へ入れたのだといふ。餘りばたく、飛廻る騒々しい音がしたので、かねて正岡さんの話もあり、急いで來て見ると、黒猫が爪を出して、かうやると、カナリヤは大う

ろたへでばた〜する。も少し遅かつたら、羽なり足なり猫にしてやられるのであつた。それから内に入れてやつてから息もつかず鳴いたこと、鳴いたこと、その鳴く聲がクウクウポロ〜〜〜チャチャチャポロ〜〜〜チュチュホウ〜〜〜

明るくてもいの花に菜種さしそふる

碧

はこべ(紫萁)



蹟筆桐梧碧

といふのがおきまりであること、はこべを採つて来てやつたら、さも嬉しさうに食つたこと、大騒ぎで話された。

三月二十二日 籠はやはり座敷の上座で夜が明けた。雨戸を明けてやると、二羽が一度にチ、〜と嬉しさうに鳴

ちやんと…ある

く。今朝は少し寝過したので、待ちかねてゐたらしい。始めてその鳴く姿を見た。胸の毛が逆立つてぶる〜とふるふと一緒に、頭の毛も稍ふるひ立つ。頭を左右に動かして調子をとりながら、例のクウ〜ポロ〜〜と鳴き出して、チャチャで最も高音を張り、ホウ〜〜でおしまひになる。ちやんと文章でいふ山もあるが、時には調子が狂うて、ポロ〜ポログジュ〜〜と何かを踏附けたやうに鳴き潰れる事もある。

上田敏  
英文學者、詩人。  
文學博士。東京市  
の。大正五年歿。  
年四十三。

二一 ちやるめら

上田敏

薄日のかげも衰へて、

風冷やかに雲低き、  
鈍色空のゆふまぐれ  
はづれの辻のかたすみ、  
ちやるめらの聲吹きおこる。

はじめの節のゆるやかに  
心を誘ふ管の聲、  
音は華やげるしらべかと  
おもへば、あらず、せきあぐる  
悲哀の曲の搖曳に。  
響はるかに鳴りわたる、

おほまが時のうすあかり、  
館屋の笛にそゞろげる、  
子供心もおのづから  
家路をおもふ二の聲に。

細き金具の歌口に  
かなしみあふれ、氣もなえて、  
折りまはしたる聲のはて、  
忽ちくづれ調かはる  
あゝ、ちやるめらの末の曲。

(上田敏詩集)

## 二二 清淨潔白

こざつぱりとした木綿物は氣持がよい、新しい青疊は居心がよいと言ふ我が國民は、清潔を愛する民族である。日本人のやうに盛んに全身浴をする國民は外にあるまい。東京市の湯屋は千軒もあり、その外、中流以上の家には各湯殿があつて、二百萬の住民のうち凡そ三分の一づつは、毎日入浴する割合だといふ事である。ベルツ氏は、日本の氣候家屋の割合にリウマチスの少いのは、全く日本人が入浴を好む結果だらうと言つてゐる。

錢湯の起源は新しいにしても、湯あみ、水あみの習慣は太

東京市の云々  
これは大東京以前  
の事で、現在の東  
京市にはこれ以上  
ずつと湯屋も多く  
人口も五百萬を越  
えてゐる。

ベルツ  
ドイツの醫者。長  
い間東京帝國大學  
の御雇教師であつ  
た。西紀一八四九  
—一九一三年。

新しいにしても

天皇  
景行、仲哀、舒明  
齊明、天智及び天  
武の諸天皇。

伊香保  
群馬縣群馬郡。  
有馬  
兵庫縣有馬郡。

書には...書  
いてある

古からあつたのである。且日本全國到る所に温泉のある事  
も、他國には例がない。伊豫道後の温泉には天皇も行幸にな  
つて、推古天皇四年の道後の碑文は、我が文學史中の最古文  
の一標本である。その外、伊香保、有馬、箱根等の温泉は、皆歴史  
上に名高いものである。ドイツのケーニグスマークといふ  
人の書いた「日本及び日本人」といふ書には、日本人の入浴の  
事を賞揚して、これだけは大いに眞似すべき事と書いてあ  
る。ベルリン市などでは公衆衛生の必要から、到る所に浴場  
を公設して、労働者等の入浴を奨励してゐる。余は先年ドイ  
ツ留學中、或夏田舎の冷泉浴場に遊んで、日々入浴したが、同  
行のドイツ人は、どうしてもはいらうとは言はぬ。全身冷水

必要なし

ジッチンゲン  
プロシヤ州の町。

摩擦をすれば、別に入浴する必要なしといふ論である。同人の言に、日本人の短命なのは、恐らくは温浴を好む結果であらうなどと言つてゐた。ジッチンゲンと言へば、人口八千ばかりの町であるが、其所には一軒の湯屋もない。或滑稽雑誌で、若夫婦が新宅を探し歩いて、家主と問答中、家主が「此所には湯殿も附いてゐる。」と言ふと、夫の答に「何、我等はめつたに病氣にはならぬから、湯槽ゆばはいらぬ。」と言つた記事を見た事がある。病氣にでもならなければ、湯にはいらぬつもりと見える。中學校の讀本に日本の記事を掲げて、入浴の事を記し、「ドイツも昔三十年戦争までは盛んに入浴したが、その戦争の疲弊後この風が廢つたので、これは復古すべき事である。」と

三十年戦争  
西紀一六一八年ド  
イツで起つた戦争。  
一六四八年まで續  
いた。

日露戦争の最中  
も……感じたのは

……特性である  
と書いてあると

チェンバレン  
イギリスの人。日  
本學者。東京帝國  
大學文學部名譽教  
授。西紀一八五〇  
—一九三五年

書いてあるのも見た。日露戦争の最中でも、日本人の最も不自由に感じたのは、入浴の不便な事であつたらしい。とにかく日本人は身體を綺麗に洗つて、さつぱりとする事が好きである。清淨は日本の特性であると、西洋人の日本人に關した記事には必ず書いてある。チェンバレン氏は、日本は多くの事がらを支那から輸入したが、これだけは日本特有だと言つてゐる。支那あたりから見れば、殊にその差異の著しいのを感じるのであらう。

日本人の全身浴は伊弉諾尊の神話に現れてゐる。伊弉册尊がお隠れになつたのを黄泉國よみのくにへ行つてのぞいて、汚い物を見たといふので、檍原あはせで御禊をなさつた。御禊は身そゝぎ

我等の洗ひ落  
した後

ひげ(髯、髭)

で、身體を清淨に洗ふ事である。目で見たばかりで身體が汚れるといふのは、潔癖の甚だしいものと言はねばならぬ。すべて上代の日本人は、身體の汚も、精神の汚も殆ど同一に考へてをつて、身體を清淨にすれば、精神もおのづから綺麗になる。と考へたのである。我等の入浴して垢を洗ひ落した後は、精神もおのづから爽快になるから、かう考へたのも自然である。それで、若し道德上の罪惡を犯した者でも、身滌をすればその罪が消えて行くのである。多くの宗教で懺悔をすれば罪が消えると考へたと同様、身滌をすれば罪が消えると考へたのである。素戔嗚尊が、神遣に遣はれ給ふ時は、ひげを切られ、爪を抜かれたが、これは贖罪の爲である。このは

朱雀門  
もとの京都の南面  
の正門で、址は今  
中京區西ノ京車坂  
町の内といふ。

すべての罪が  
流し棄てられる

らひの思想は、祝詞の大祓詞おほはらひのこしほによく表れてゐる。これは毎年六月、十二月、皇城の朱雀門で行はれたので、天下の萬民が知らず識らずのうちに犯したすべての穢や罪をはらふ爲である。その文を見れば、人々の罪はまづ河水と共に流れて行つて、早川の瀬にゐる瀬織津姫せおりつひめといふ神が大海に持出す。其所では速開都姫はやあきつひめといふ神がこれを一呑に呑む。それを氣吹いきぶき戸主とぬしといふ神が根の國、底の國といふ汚い國へぶうつと吹放つてしまふ。根の國、底の國にゐる速佐須良姫はやさすらひめといふ神は、これを何所かへやつて、なくなしてしまふ。かういふ風に、すべての罪が郵便物のやうに順々に神たちの手に渡つて、遂に大海へさらりと流し棄てられるのである。この祝詞の中



には、身體の汚のみならず、いろ／＼な罪惡も數へてある。即ち一年に二度づつ、半年間の汚を流してしまひ、忘れてしまつて、また新しい生活をしようといふのである。これは恆例の祓であるが、その外に臨時の祓といふものがあつた。また朝廷のみならず、民間でも祓の式を行つた。中古の物語や日記には、祓の事があちらこちらに見える。百人一首の

風そよぐならの小川の夕暮は

みそぎぞ夏のしるしなりける

も六月の祓である。菅や茅で輪の形を作り、その輪をくゞる事は、今も神社で行はれてゐる。紙で形代を作つて、それに男女の別年齢を記して祓ふ事も、現今行はれてゐる。皆昔の名

風そよぐ云々  
新救撰集、藤原家隆。

河野省三  
倫理學者。文學博士。國學院大學長。明治十五年、東京に生れた。本學博に文は特に書かれた。爲新作したもの。

残である。

### 二三 五十鈴の流

河野省三

昔西行法師は伊勢の大神宮に詣で、そゞろに深い敬虔の念に打たれて、

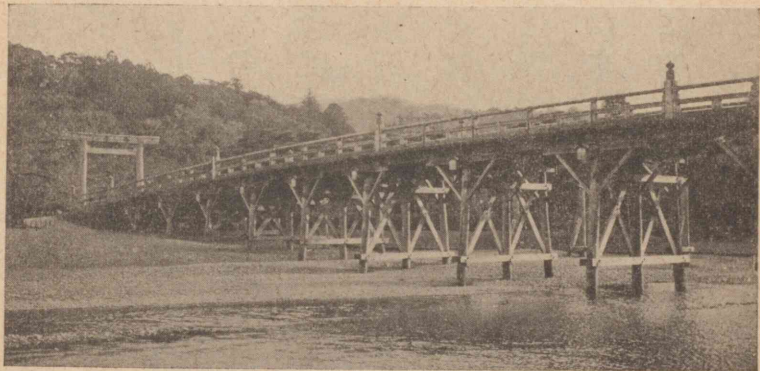
何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

と詠じた。神路山の翠濃やかに、五十鈴川の流清らかな神境に歩を運び、すが／＼しく神々しい御神殿を千木高く彼方に仰いで、後に額づき奉る時、誰しも尊さと畏さと、懐かしさとの氣持が胸に溢れて來るのである。其所は我が皇祖天照

神路山  
三重縣度會郡。宇治内宮を繞る鬱蒼たる山林である。  
五十鈴川  
神路山及び島路山に發し、神域内を流れ、二見に至つて伊勢海に注ぐ。  
額づき奉る

文久元年  
第百二十一代孝明天皇の御代。二五二年。



五 十 鈴 川

大御神を齋き奉る所遠い昔から皇室と國民と一體となつて崇め奉る所天壤と共に窮りない我が寶祚と國運とが、御裳濯川の流遠く我等日本民族の心の底を流れ行く信念の舍る所である。文久元年橋曙覽は此所に參拜して

おはしますかたじけなさを

何事も知りては

いと涙こぼるゝ

といふ一首に、その滿腔の感激を表

してゐる。

げに神宮の歴史を知る事は、即ち我が皇室の歴史を知る所以であり、我が皇室の歴史を知る事は、即ち我が國史の精髓を明らかにする所以である。嘉陽門院越前の歌に

いすゞ川その水上をたづぬれば

神路のやまにかゝるしら雲

とあるやうに、神宮の御鎮座を究め、その由來を調べてみる

と、まことに悠久の感慨に入るのである。皇祖天照大御神が

皇孫瓊杵尊に皇位の御璽として三種神器を親授せられ、

天壤無窮の神敕を賜うた時、特にその寶鏡に就いて優渥な

御言葉を添へられた、爾來歴代の天皇はその御遺訓に基づ

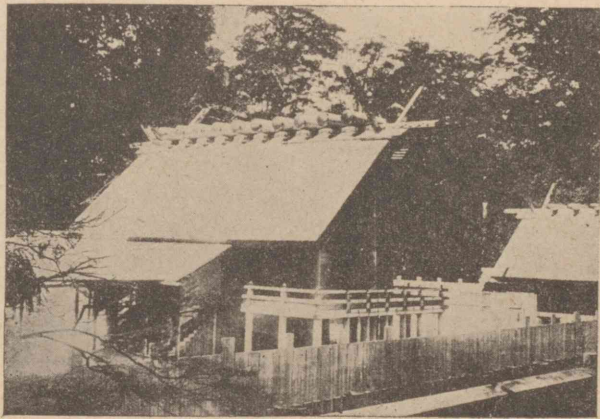
嘉陽門院越前  
鎌倉時代初期の歌人。第百二十一代孝明天皇の皇女禮子内親王に仕へた。

親授せられ

奉齋せられ  
崇神天皇  
第十代。

笠縫邑  
奈良縣磯城郡。

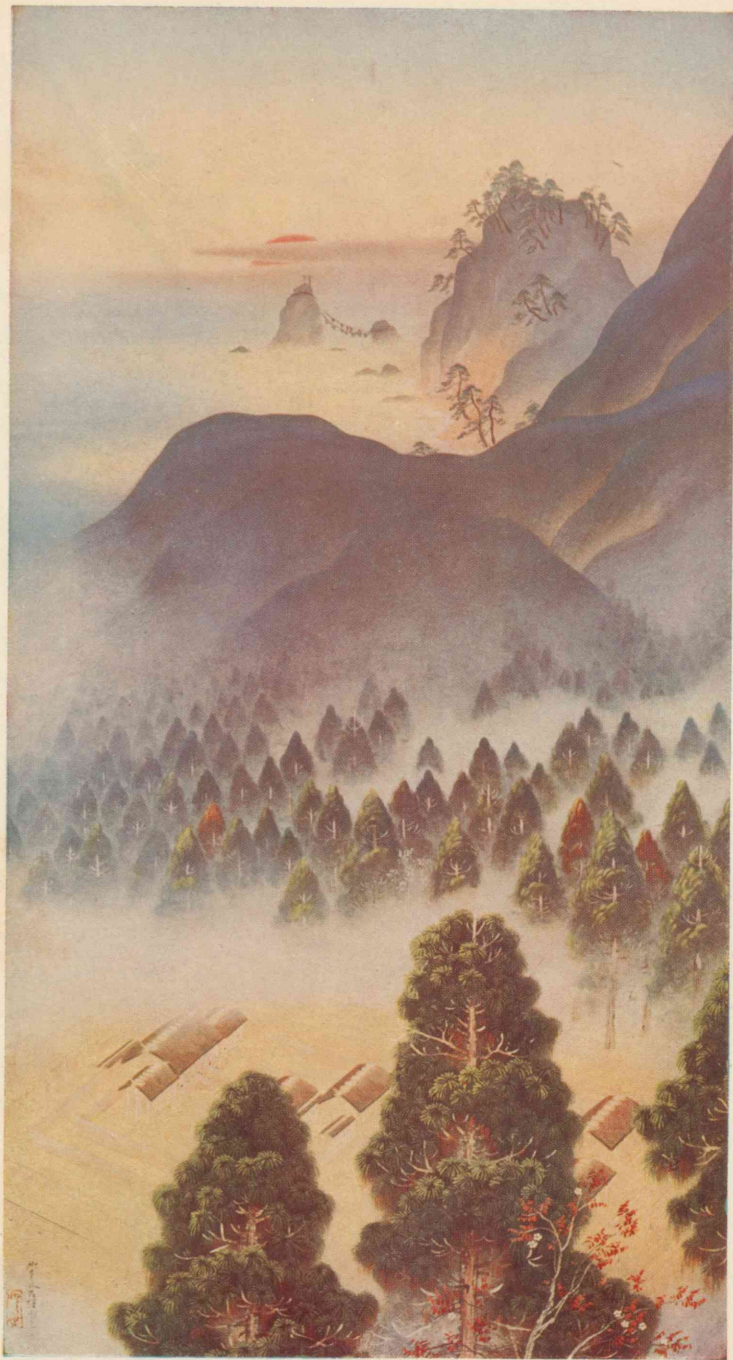
豐鍬入姫命  
崇神天皇の皇女。  
第一代の齋宮。  
垂仁天皇  
第十一代。  
倭姫命  
第二代の齋宮。今  
宇治山田市外倉田  
山上の倭姫宮に祀  
られる。



皇大(宮内)神宮

いて、皇祖の大御心を體し、親しく同殿共床の御儀を以て神器を奉齋せられたのであるが、崇神天皇の御代に、神威の發揚と皇威の發展とに伴なひ、神璽は御傍に留め、寶鏡と靈劍とは、政務の繁劇な宮中から笠縫邑の靈域に遷して、嚴かな神殿を創建し奉つた。皇祖の神靈を奉齋した神宮には、皇女豐鍬入姫命が恭しく奉仕せられ、更に適當な靈地を求めて丹波、大和、吉備の諸國を巡り、次いで垂仁天皇の皇女倭姫命が

神路山 岩田豐鷹筆

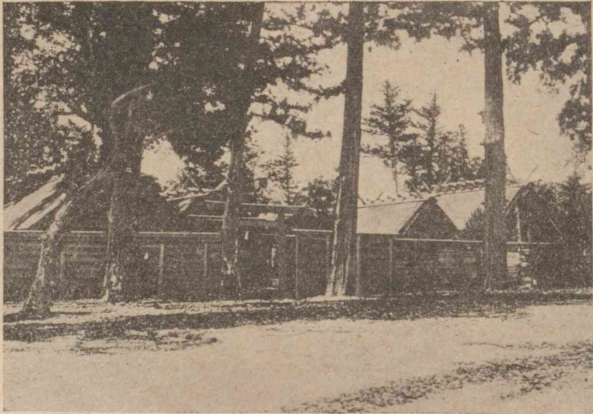


その二十六年  
六五七年。

景行天皇  
第十二代。

雄略天皇  
第二十一代。  
二十二年。  
一三八年。

代つて齋宮となり、伊賀近江、美濃の諸國を経て伊勢に出で、



(宮外) 大神宮

その二十六年九月、此所に畏くも五十鈴川の上に宮柱太く千木高く鎮座し奉つた。これ即ち皇大神宮であつて、宮中に模造してとゞめ奉つた神鏡も、内侍所即ち賢所（ちまきり）として、篤くこれを崇め奉つてゐる。

その後、靈劍は景行天皇の御代に日本武尊の東夷征伐に際して尾張國熱田に遷座せられ、また雄略天皇の二十二年九月に

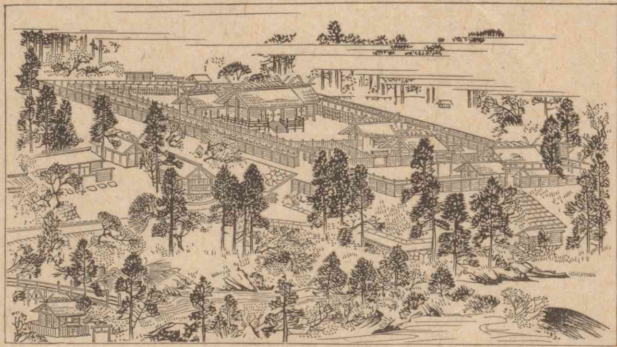
奉祀せられ

軫念あらせられ

なつて、豊受大神の神靈が丹波國から山田原に迎へられて、皇大神宮即ち内宮近く奉祀せられた。これ即ち外宮である。豊受大神は大御神の御饌都神であつて、蓋し大御神が國民の生活に軫念あらせられて、皇孫に齋庭の稻穂を賜はつた神敕に基づいて奉齋せられたのである。皇大神宮の御創立と御奉仕とに功績の多かつた倭姫命は、天資聰明叡智で、後世に及した感化も深いから、大正十二年の冬に至つて、内宮の別宮として奉祀せられる事となつた。

神宮は内宮、外宮、いづれも神明造の正殿のやゝ、後方左右に相對して東西寶殿が立ち、瑞垣、蕃垣、内玉垣、外玉垣、板垣を以て圍まれ、一般には板垣南御門を入つて、外玉垣南御門の

天武天皇  
第四十代  
後村上天皇  
第九十七代



内宮鳥瞰圖 (るよに志勝名都神)

前で拜し奉るのである。天武天皇の頃から、二十年ごとに木の香新しく造營し奉る事となり、後村上天皇の朝以降二十一年目ごとになつた。御造營は力めて古來の建築様式を守り、主として檜材を用ひて、御屋根は茅葺とし、彫刻色彩を以て裝飾する事なく、専ら莊重と清淨とを旨としてゐる。

明治天皇が、

いにしへの姿のまゝに

あらためぬ神のやしろぞたふとかりける

とお詠みあそばされたのは、蓋しこの事であらう式年御造營に際しては、種々のゆかしい祭祀の後、莊嚴盛大な正遷宮が行はれる。昭和四年十月の第五十八回の遷宮祭には、全國各種團體の代表者もその盛儀に參列して、皇運の無窮と國運の隆昌とを壽いだのである。

毎年十月十七日に行はれる國家の大祭日の一たる神嘗祭は、その秋の新穀をまづ皇祖の大御神に奉る神宮の御例祭である。齋宮として奉仕した齋内親王は、後醍醐天皇の朝に至つて斷絶したが、明治の御代以來は特に神宮司廳を設け、親任の祭主を置かれ、なほ大宮司、少宮司、禰宜以下多くの神官が奉仕する事となつた。年中の恆例臨時の諸祭典は、即

齋内親王は……斷絶したが

ち上皇室より下國民に至るまで、心を一にして皇祖に奉仕し、以て寶祚の無窮、國運の發展を祈るところの道德と生活との反映であつて、明治天皇の御製に

神風の伊勢の宮居のことをまづ

ことしもものの始にぞきく

とあそばしてをるのは、全くこの深い大御心に出てをるのである。國民が伊勢參宮を以て一生一度の懐かしい榮ある義務と心がけてをるのも、全くその國民性に出で、その信念によるものであつて、上下相俟つて、我が國體の精華をなしてゐるのである。されば億兆の國民が皇室を中心として我が皇國に奉仕してゐると同様に、全國十餘萬の神社も、皆こ

國民が……心がけてをる

の神宮を中心として、我が神國を守護しつゝあるのである。我等日本人は五十鈴川の清流に口と手とを清め、心を洗つて、廣前に頭を垂れた時、おのづから昭憲皇太后の御歌のころがしのばれるのである。

神風の伊勢のうちとの宮ばしら

ゆるぎなき世をなほ祈るかな

## 二四 國家と祭祀 その一

る……でいらせられ

國家といふ語はもと漢語で、國を家に譬へて言つたのである。しかし、我が國では譬喩ではない。我が國は全く一つの家で、その總本家即ち大宗家は皇室でいらせられる。我等日

の蕃別  
は……と  
ある……言ふ  
民族

本民族の宗家が天照大神の御裔である皇室であつて、我等の家は皆その分家である。それ故、皇室をばおほやけといふおほやけは大家で、大きな家の義である。おほやけに對しては、我等の家は皆こやけ(小家)である。公をおほやけと訓ずるのも、公は私に對して、もと皇室の事を言つたからである。歴史から見ると、日本の氏姓には皇別、神別、蕃別と言つて三通もあり、蕃別と言ふのは、もと外國から渡つて來た民族の氏族である。それ故、日本國民の中には、純粹な日本民族でない者も混つてゐたのである。しかし、それ等も皆多數の日本民族に化せられて、全く一つになつて皇室を大家と仰ぎ奉つて、臣民は皆みやつこと稱したのである。みやつこは御家つ

子の義で、「御家の子」といふ事である。後世の武士の家で家の子と言つたのは、宗家の分れの分家の者を言つたのであるが、それと同じやうに、日本臣民はすべて、皇室即ち大家の「家の子」であるのである。此所に日本の特殊な國體がある。

外國の帝王は人民の中から起つたのである。多くは武力を以て王冠をかち得たのであるが、中には徳望によつてその位に推された者もある。いづれにしても人民の中から出たので、もとは人民と同格の人である。日本ではさうでない。神代の昔、天照大神の神敕のまに、皇孫がこの國の主とお下りになつて、それで日本の國が出来たのである。皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニと仰せられた通り、我が皇室の御

御祖先が……お肇  
めになつたのであ  
る

祖先が、この日本の國をお肇めになつたのである。それ故、皇室は上にあり、人民は下にあつて、上下の別、君臣の分が最初から定まつてゐる。さうして、皇室即ち大家が、すべての人民即ち小家をお統べになり、お率ゐになつて、その國を知ろしめされるのである。大家は即ち國家、小家は即ち臣民の家、臣民は皆御家の子で、こゝに渾然たる日本の國家があるのである。

この大家に於て祖宗の神を祭らせられる事は、我々小家に於て祖先を祭ると同じである。伊勢の皇大神宮は御崇敬が最も厚く、昔は御代ごとに皇女御一方が齋宮として奉仕されたのであつた。後醍醐天皇の御代からこの事は絶えた



多嘉王  
故朝彦親王の第五  
王子。昭和十二年  
薨。御年六十三。

御參拜あらせられ  
た

が、今では皇族御一方が天皇の御手代として、祭主として奉仕される。今の神宮の祭主は久邇宮多嘉王殿下である。凡そ國家に大事件があれば、必ず神宮に奏せられ、天皇は必ず親ら御參拜あらせられる。明治天皇は御治世中、四回までも御參拜あらせられたが、三十七八年戦役の後の行幸は、一層御鄭重の儀であつたと承つてゐる。毎年一月四日の政始には内閣總理大臣が御前に進んで、神宮が御無事である事をまづ奏するのが恆例になつてゐる。皇宗は大宗家即ち大家の御祖先であるから、我等御家つ子の崇敬すべき大祖先である。それ故、古來の國民も皇大神宮に對し奉つては、常に崇敬し來つた。西行法師が

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

と歌つたのも、芭蕉が

何の木の花とも知らず匂かな

と言つたのも、此所に詣でて、一種言ふに言はれぬ靈感に打たれたのである。一生に一度はお伊勢參をしなければならぬと、やがて家長となるべき昔の男子は皆心掛けてゐたのである。この心は今もなほ全國民に行渡つてゐる。家の郷土の神を尊敬する心を以て、大家の神、國家の神を尊敬するのである。

上古は祭政一致と言つて、祭祀は即ち政治であつた。政を

かたじけなさに涙  
こぼるゝ

まつりごとと言ふのはこれが爲である。暫く昔の祭祀の有様を想像せよ。すめらみことが山の物、海の物さまざまの物を供へて、祖先の神をお祭りになる。その儀式は嚴かで、その儀式は恭しい。音楽が奏せられる。祝詞のりとが奏せられる。御家つ子は尊卑老幼の順序を以てその祭祀の庭にうづくまる。参集した一同は「明き心」で皇祖の御靈に對し、現まつ御神の御親祭に侍るのである。

忠も孝も信も皆會得されるのである

その儀式の嚴かで、儀禮の恭しいのが即ち我が國の禮法の根源である。上下の別、老幼の序は明らかにこゝに實現される。人々は皆「明き淨き心」を以て神に誓つて、こゝに後世の語で言ふ「忠も、孝も、信も皆會得されるのである。かくして相

睦び、相敬して、平和に幸福に生活を營む。これが即ちかんながら惟神の道で、我が國の不言實行の道德であり、さうして、それがまた政治であつた。

後世になつては、政治の事務が多端になつて、祭事と政治とは別になつた。しかし、その精神は今日まで傳はつてゐる。精神ばかりではない、天皇は今なほ祭事を國家の祭祀として崇め奉るのである。前に言つた一月四日の政始も、祭政一致の旨を表してゐるが、各大祭日の宮中の御祭祀は、即ち國家の祭典である。宮中に於ける各大祭には大抵天皇が親祭あそばされるが、御病氣その他御事故のをりには掌典長が代つて奉祀する事もある。一般の官廳學校などは休日であ

官廳學校などは休日であるが

るが、宮中では最もお忙しい日で、皇族をはじめ高官の人々は、上古の世と同じくその祭祀の庭に参列するのである。大祭日を休暇日と思つて安逸に過してはならぬ。國家祭祀の意義ある日である事を忘れてはならぬ。

### 二五 國家と祭祀 その二

農を本とした日本國及び國民の爲には、年の豊凶が重大な事件である。それ故、新嘗祭は最も重いお祭である。また神宮の爲には、別に神嘗祭も行はせられるのである。豊年の秋の村祭も、その感謝の意味に於ては新嘗祭の小さい私祭と言つてもよろしい。天皇は年々國民一般に代つてこの大祭

新嘗祭  
十一月二十三日。  
神嘗祭  
十月十七日。

行はせ給ふ

を行はせ給ふので要は親しく祖宗の神靈に向つて、國家の繁榮と臣民の幸福とを祈らせ給ふのである。この新嘗祭の一世一代御即位の禮と共に行はれるのが大嘗祭である。

新嘗祭は十一月末の薄寒い頃、宮中神嘉殿に於ける夜をこめての御祭典である。御親祭のをりには、天皇の外一人も御殿の中に入る者はない。掌典の奉るくさくの捧物を御身親ら捧げ給ひ、親しく神靈に告げ給ふのである。明治天皇の御親祭を拜し奉つた人の話に、御親祭が終つて御殿を出でさせ給ふ時には、玉顔に御汗の流れるのを拜し奉つたといふ。森嚴なこの御祭祀、天皇はたゞ國家の爲、國民の爲と義務になるのである。

拜し奉つた人

天照大神が親ら新嘗祭をあそばした事が古典に載つてあるのを見ても、この祭典の開闢以來の儀典であつて、皇祖以來行はせられた事がわかる。歴代の天皇は即ち神代のままの祭祀を、そのままに相繼いで行はせられるのである。祖先の道をたがへず履ませられるのである。皇族をはじめ高位高官の者のその庭に侍る事、今も昔の通りである。古風の樂の調べ、夜のお祭に焚くかゞり火など、いづれも神代の昔を思はしめる。今日の祭典は即ち祭政一致時代の祭典そのまゝである。國家行政の一部分といふ精神を以て行はせ給ふのである。國民一般の爲の儀典であつて、狭い宗教的のものではない。

昔を思はしめる

ちゝは、は、云々  
 「父母は我が家の神我が神とこゝろつくしていつけ人の子」(玉矛百首)  
 本居大人  
 本居宣長のこと。

宮中に於て祖宗をお祭りになつて、大孝を申べさせ給ふのは、大家として我等に範を示させ給ふのである。小家たる臣民の家々に於てもまた伊勢の大麻を頂戴して、國家の神を祭り、且また我等の祖先の神を祭るのである。大家、小家共に、祖先から下つて悠久に子孫に續く家であるからである。

「ちゝは、は、我が家の神と本居大人の歌はれた通り、父母をも神として仰ぐのが日本人の家庭である。まして親の親、遠つ親を尊崇するのは當然である。生きています親と、既に世を去られた親とは、等しくこれを尊崇するのである。現つ御神を尊崇すると同時に、祖宗の神をも尊崇するのである。宗教を誤解してある信者の中には、自己の信ずる神の外

日本國民たる者

は禮拜する必要はないなどと思つてゐる者がある。これ等は既に自己の親を忘れてゐる者である。生きてゐる親は尊敬するが、死んだ親には敬禮せぬ、現つ御神は尊重するが、祖宗の神は尊重せぬといふのは、理窟に合はぬ事である。日本國民たる者は、自己の信ずる宗教の何たるに拘らず、よく祭祀の意義を解して、至尊の御身を以て國民の爲に祖先崇敬の模範を示し給ひ、また國利民福を祈らせ給ふ大御業に感謝しなければならぬ。

女子新國文 改制新版 卷四終

字音假名遣表

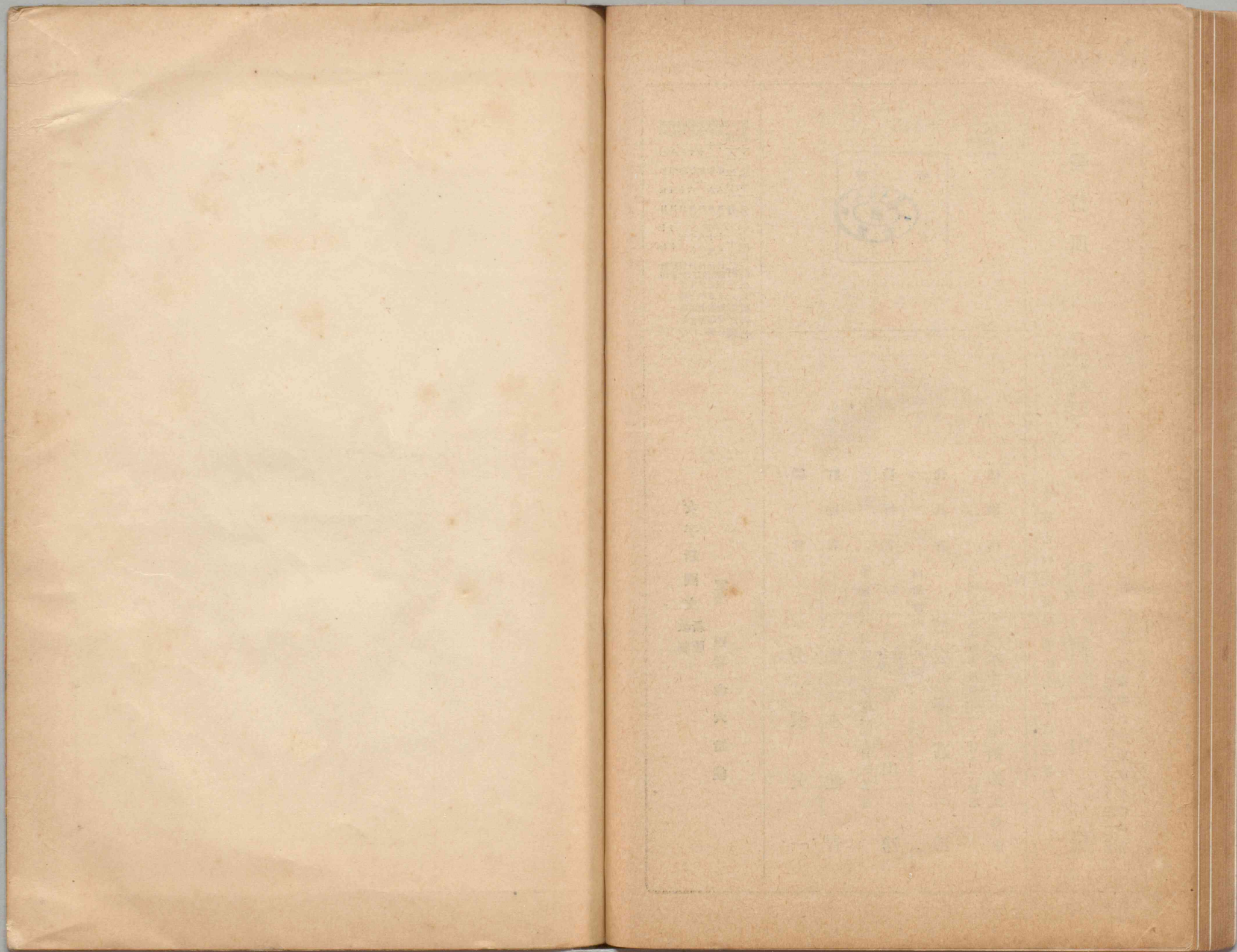
| 工                               |                            |                       | イ                     |                       |                       | 音發          |
|---------------------------------|----------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-------------|
| ん                               | ゑ                          | つゑい                   | ん                     | つゑい                   | ゑ                     | 名假<br>字本基   |
| 垣<br>媛<br>媛<br>媛<br>媛           | 宛<br>宛<br>宛<br>宛<br>宛<br>宛 | 越<br>越<br>越<br>越<br>越 | 院<br>院<br>院<br>院<br>院 | 員<br>員<br>員<br>員<br>員 | 員<br>員<br>員<br>員<br>員 | 系<br>統<br>字 |
| えん                              | えつ                         | えい                    | えん                    | えつ                    | えい                    | 例<br>外      |
| オ                               |                            |                       | オ                     |                       |                       | 音發          |
| わ                               | く                          | う                     | わ                     | く                     | う                     | 名假<br>字本基   |
| 火<br>戈<br>瓜<br>寡                | 過<br>過<br>過<br>過<br>過      | 王<br>王<br>王<br>王<br>王 | 應<br>應<br>應<br>應<br>應 | 園<br>園<br>園<br>園<br>園 | 園<br>園<br>園<br>園<br>園 | 系<br>統<br>字 |
| (が)か                            |                            | あう                    | おん                    | おつ                    | おく                    | 例<br>外      |
| カ                               |                            |                       | カ                     |                       |                       | 音發          |
| ん                               | わ                          | つ                     | わ                     | わ                     | わ                     | 名假<br>字本基   |
| 貫<br>官<br>菅<br>管<br>棺<br>館<br>宦 | 完<br>莞<br>浣<br>冠           | 活<br>括<br>括<br>闊      | 郭<br>廓<br>擲<br>擲      | 獲<br>獲<br>獲<br>獲<br>獲 | 悔<br>悔<br>悔<br>悔<br>悔 | 系<br>統<br>字 |
| か                               | つ(が)か<br>割                 | か<br>活                | か<br>活                | か<br>活                | か<br>活                | 例<br>外      |

字音假名遣表

|                                      |              |            |          |                 |           |           |          |            |            |          |            |          |          |
|--------------------------------------|--------------|------------|----------|-----------------|-----------|-----------|----------|------------|------------|----------|------------|----------|----------|
| 一                                    |              | ソ          |          | ズ               |           |           |          | ジ          |            |          |            |          |          |
| ら                                    | そ            | ふざ         | ふさ       | みず              | ず         | んち        | くち       | よち         | つち         | つち       | くち         | きち       | ち        |
| 勿奏叟曾宗<br>忽湊搜僧宗<br>惚輓瘦增崇<br>艘憎贈踪<br>層 |              | 雜          | 插<br>匝   | 蕊瑞隋<br>藥喘隨<br>髓 | 受手誦<br>從數 | 陣沈塵       | 濁        | 抒女<br>除    | 怵          | 呢        | 咄軸<br>忸軸   | 直        | 治地<br>除  |
| (ざ)                                  |              | さ          |          | づ               | づ         | じん        | じく       | よじ         | つじ         | じつ       | じく         | じき       | じ        |
|                                      |              | 嫂          |          |                 |           |           |          | 徐恕如<br>敘序汝 | 述術         |          |            |          | 侍時       |
| 一ト                                   |              | 一ヨ         |          | 一チ              |           |           |          | 一ユ         |            |          |            |          |          |
| らと                                   | ふた           | らよち        | ふて       | ら               | て         | ら         | ち        | ら          | ち          | ら        | ち          | ら        | ち        |
| 冬東榻榻<br>疹凍棟                          | 楊納沓答<br>納踏塔搭 | 重徵家<br>澄懲塚 | 帖蝶<br>貼喋 | 吊釣趙肇            | 烏焉<br>馮詔  | 超調挑<br>韶韶 | 朝潮<br>潮朝 | 蟲齋<br>齋齋   | 厨誅注<br>厨誅注 | 中仲<br>中仲 | 塾          | 宋總<br>宋總 | 嗽漱       |
| (だ)                                  |              | た          |          | ら               | ち         |           |          | ら          | ち          |          |            |          | 窓        |
| 一ヨヒ                                  |              | 一ノ         |          | 一ヨニ             |           | 一ユニ       |          | 一ド         |            |          |            |          |          |
| らよひ                                  | らべ           | らへ         | らふ       | らの              | らに        | らふ        | らね       | らに         | らふ         | らど       |            |          |          |
| 氷馮憑<br>憑憑                            | 廟秒苗<br>廟秒苗   | 飆票表<br>飆票表 | 納能<br>納能 | らの<br>らの        | らに<br>らに  | らふ<br>らふ  | らね<br>らね | らに<br>らに   | らふ<br>らふ   | らど<br>らど | 動童同<br>動童同 | 藤藤<br>藤藤 | 讀讀<br>讀讀 |
|                                      |              |            |          |                 |           |           |          |            |            |          |            |          |          |
| らや(び)ひ                               |              | なう         |          | らやに             |           | らう        |          |            |            |          |            |          |          |

|                        |            |                  |                 |            |            |            |            |            |            |                  |            |                  |            |            |            |
|------------------------|------------|------------------|-----------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------------|------------|------------------|------------|------------|------------|
| ウ                      |            |                  |                 | ヨ          |            |            |            | キ          |            |                  |            | ウキ               |            |            |            |
| ふか                     | ふけ         | ふけ               | うげ              | ふ          | け          | うよ         | き          | うよ         | き          | うよ               | き          | うよ               | き          | うよ         | き          |
| 盍甲恰<br>濫岬洽<br>閩匣胛<br>狎 | 業          | 劫協夾<br>怯脇挾<br>脅脅 | 堯僥澆<br>曉曉<br>駢駢 | 叫鼻<br>教    | 喬橋嬌<br>嬌嬌  | 與矜競<br>疑   | 恐供拱<br>登恭  | 凶兇匈<br>匈匈  | 宮弓躬<br>窮窮  | 泣給及<br>急翁吸<br>級級 | 願元丸<br>玩頑丸 | 寬灌環<br>關權還<br>鏗鏗 | 環還<br>環還   | 喚換<br>喚換   |            |
| か                      | ら          |                  |                 | (ぎ)        |            | き          | う          | き          | ん          | (が)              |            |                  |            |            |            |
| ウ                      |            |                  |                 | ユ          |            |            |            | シ          |            |                  |            | コ                |            |            |            |
| らう                     | らゆ         | らじ               | らし              | らふ         | らし         | らわ         | らわ         | らふ         | らこ         | らこ               | らこ         | らこ               | らこ         | らこ         | らこ         |
| 頭重住                    | 戎充從<br>絨銃縱 | 衆終宗<br>聚聚崇       | 拾執集<br>執集       | 拾執集<br>執集  | 拾執集<br>執集  | 轟          | 宏荒廣<br>荒廣  | 業劫公<br>業劫公 | 公構洪<br>公構洪 | 公構洪<br>公構洪       | 公構洪<br>公構洪 | 公構洪<br>公構洪       | 公構洪<br>公構洪 | 公構洪<br>公構洪 | 公構洪<br>公構洪 |
| ら                      |            |                  |                 | (じ)        |            | し          | ら          |            |            |                  | 講          |                  | (が)        | 項          | 江          |
| ウ                      |            |                  |                 | ヨ          |            |            |            | シ          |            |                  |            | セ                |            |            |            |
| らて                     | らや         | らち               | らよ              | らじ         | らし         | らふ         | らせ         | らせ         | らせ         | らせ               | らせ         | らせ               | らせ         | らせ         | らせ         |
| 尿條溺<br>尿條溺             | 貞定孃<br>娘錠杖 | 乘剩丞<br>剩丞蒸       | 承勝稱<br>稱誦證      | 棟衝從<br>棟衝從 | 從從從<br>從從從 | 松昇陞<br>松昇陞 | 涉攝捷<br>捷捷捷 | 捷捷捷<br>捷捷捷 | 捷捷捷<br>捷捷捷 | 捷捷捷<br>捷捷捷       | 捷捷捷<br>捷捷捷 | 捷捷捷<br>捷捷捷       | 捷捷捷<br>捷捷捷 | 捷捷捷<br>捷捷捷 | 捷捷捷<br>捷捷捷 |
| ら                      |            |                  |                 | ら          |            | ら          |            | ら          |            |                  |            | (じ)              |            | し          |            |









二  
尾花田ノミ子